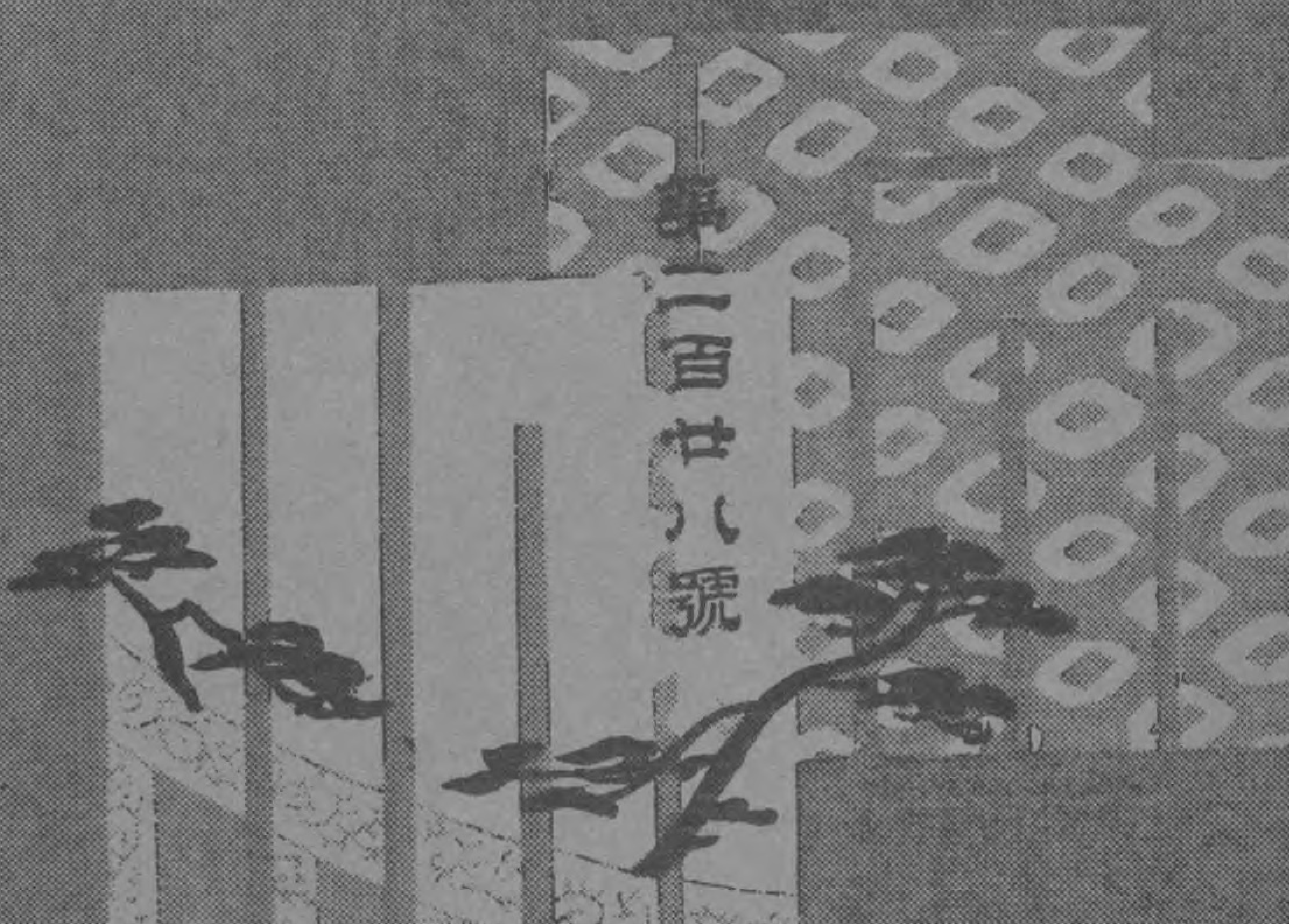
[illegible]

明治三十四年五月五日發兌

女鑑



女鑑第貳百貳拾八號

目録

定價
一册　金拾錢
六册三ヶ月分　金五拾五錢
十二册半年分　金壹圓
全國無逓送料

明治三十四年五月四日印刷
明治三十四年五月五日發行

編輯兼發行人　川崎直衛
印刷人　並木頁雄
發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　國光社
發賣元　東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地　靜思館
（電話本局一千三百七番）

豫約募集

新式女子体操書豫約廣告

大日本体育會附屬體操學校講師 白井規矩郎先生解説

女子生理的訓練法

上製全一冊 定價一圓八十錢 ◎目次 啞鈴體操 毬體操 プラム體操 木環體操 シンバー體操 脛脚體操 進行體操 其他生理的遊戯二種

本書は英國ノース、ハッケニー女子高等學校長ジエームス、アリス女史の考案に係る女子該適の新式体操に基き白井先生の本邦女子に適する樣改訂斟酌して、体操學校其他二三の高等女學校に實施せられつゝある所の稿本なり曩に諸教育雜誌上に於て其端緒を紹介せられたるに詳細なる解答を希望せらるゝもの多數なるを以て本書を解説せられ弊館出版の榮を得、玆に豫約募集をなす續々御申込を乞ふ

一挿圖 總計百四十七圖にして中百三十五圖は寫眞銅版

一實驗 印刷製本實費郵送費ともにて一部金一圓三十錢 代金引換便なれは金拾錢増の事 但し代金引換便は前金送附せられ難き學校及官衙に限る

一申込 期限卅四年五月廿日まで

一定員 五百部を以て滿員さし、定數後は定價より割引せず、又期限中さ雖も定數に達せば締切さす

一發送 期日は六月十日より

豫約申込所 東京神田表神保町 同文館

關西申込所 大阪東區備後町四 吉岡平助



味志　正風

[illegible]

[illegible]

神[illegible]

[illegible]

孝行[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]地[illegible]

道乃正歌

正風

女學生に與ふ

(近世女學の活用)

わが辭に飾なきを以て、貴孃等に對する禮儀を知らざるものと爲し給はざれ。われ等は、多大なる望を貴孃等にかくるものにして、尊敬の至らざらむをこそ恐るれ。ゆめ、輕侮の心あるにあらず。たゞ、實質のみなる詞は、赤裸々の誠をのべたる言は、他の、錦綉にまとはれ、寶石につゝまれたるよりも、遙かに〳〵、貴孃等に對して、有益なるものたるを思はれよ。

嫁かむがための學問にはあらず、嫁きて後の用ある學問なるは貴孃等が學を修め給ふのはじめに、夙に、覺悟し給ひじ事ならむ。さるを世の口さがなき京童等は、ともすれぞ、女子のもてる卒業證書は、一種の装飾なり、嫁入道具なりと嘲れり。われ等の、貴孃等に信ずるところ厚きや、はじめは、いたくこれを叱責して斥けたりき。然るに、かれ等の罵りは、われ等の叱責よりも、大に、遂には、われ等

も、聊か、京童の言を信ずるに至りぬ。

あはれ、貴孃等、京童は、實に、煙なきの火を談らず、また、影なきの形を捉へざりき。貴孃等の悉皆とまでは言はざるも、大部は、嫁かむまでの學問、裝飾用の卒業證書を得たまへるが如し。われ等、かく言ふは、貴孃等に對して、無禮なりとのたまふか。われ等は「あらず〳〵」と答へむとす。

多々の學校に於て、貴孃等を敎へ導きたる師の君に問ひ給へ。何れか、貴孃等に活用すべからざる學を授けたる。貴孃等は、或は一學校の秀才、或は一學藝の天才と呼ばれ給ひたるもあらむ。然るを、嫁き給ひて後の擧動は、われ等の述べむまでもなく、みづから顧みて、みづから判じ給ふ可し。

家政の學、庖厨の學、音樂その他の技藝を、嫁きて後の家庭に應用し給はむは、めでたき事には相違なきも、樣によりて、胡盧を畫き給ふものと評するも、その言の酷なる由をば、訴へ給ひ難からむ。わが活用を望むこと切なるは、その規律的敎練にあり。その普通學的智識にあり。この二者は、貴孃等今日の敎育をうけたる人々に對して、大に望を屬すべきのことにして、貴孃等學問の功績の最もな

がる可き方面なり。而して、貴孃等の家庭に生育せる、今の年少子弟は、この二點に於て、たゞに、貴孃等以前の家庭に優らずといふのみにはあらず、往々にして、却りて、これに劣るやの觀ある所以のもの、果して何の理ぞや。貴孃等活用の力薄きか。これ學未だ足らざるなり。何ぞ、奮然として、更に、志を起さざる。貴孃等毫も活用の念なきか。京童の詬罵、遂に、甘受せられざる可からず。嗚呼、これ、獨り、貴孃等の名譽のみにはあらざるなり。延いて、現代女學進歩の上に及ぼす所、その影響、豈に、少々にして止まむや。孃等それこれを思へ。

花木の花を賞翫すれば、日除け霜除けなして虫を取り、鳥を嚇して、撫でさすらねばかりに、大事にはすれども、肝要の根に、土かひ肥を入るゝ道を知られば、色香の榮えを願へども、やがて、枝葉も枯れ、花もすがれて、見事なりし木も、いつのまにかは、薪さなること、根に心をつけざりしあやまちなり。國用の盈虚、家産の貧富も亦然り、根を忘れて、枝葉の榮を望み願ふ心より、富を求めむとせしに、いつのまにかは貧になりゆくことなり。草木の花の榮えを願はゞ、根株に心をつくるを專要とし、國家の富を願はゞ、榮辱の實意を辨へ知るを基とすべし。

（細井平州）



婦人の早衰（五）

三輪田眞佐子

婦人の早衰は、一に、身體上の早衰、二に、精神上の早衰と區別して見るを、便ありとす。

第一身體上の早衰、身體と精神とは、相關係するを以て、身體强健ならざれば、おのづから、精神も不快なるを免れず。亦精神活潑ならざれば、身體も柔弱となるは事實なり。故に、婦人の早衰を憂ふるものは、身體と精神の兩者を研究して、この弊を妨がざるべからず。

身體の早衰を豫妨するには、先つ、攝生と運動と飲食とに注意せざるべからず、故に、婦人は、生理衞生などの知識を有して、日時空氣の流通を良くし、光線の射入を謀り、寒暑の折につきて養生を怠るべからず。殊に、婦人特別の衞生、たとへば、産前産後の衞生などに、能く、留意して、疾病を釀することなかれ。概ね、婦人病あるものはこれらの不注意に原因するもの多しと聞けば、戒めざるべからず。見よ、婦人にして、一二人の兒を擧ぐれば、忽ち、顔色蒼然として、舊時の面目俄に失ふを。これ、早衰の著しき例なり。

運動は、小兒のみに必要なるにあらず。成年も老人も、等しく必要なり。然るに、婦人たちは、運動などを好まざるを以て、淑女の習とするは、いみじき誤見なり。唯婦人の擧動に不適當なる運動は禁ずべしといへども、適當なる運動は、さながら呼吸の缺くべからざるが如く、飲食の廢すべか

らざるがごとし。故に、呼吸と飲食を拒むは狂なるがごとく、運動を避くるは、愚痴の一種なり。少くとも、運動を欲せざるは怠惰の一種なり。蓋し、無爲に生活する貴婦人などは、綠陰に散步するも可なり。海水浴も可なり。善き遊戲法に由るも可なり、何れにしても、運動を怠るべからず、幸に、中等社會以下の婦人は、態と運動法に由らずとも、輕快に家事を勉勵せば自然に運動の効力あるは明なり。彼の、一度坐すれば半日も動かざる習慣を作り、などて、我は手足のだるき、而かも安臥の樂なるといひて、更に、衛生上輕快に、兎やせん角やせんと運動の工夫をなさゞる婦人は、勢ひ、始めのほどは、その性質の柔弱なるが原因にて運動を好まず。終に、運動を好まざるが原因にて、一層柔弱になり、柔弱なるため、いよ〳〵運動を厭ひ、以て、筋肉たるみ血液めぐらずして、早衰の基を作り、生涯を、風前の燈の如く、今にも消えなんといひつゝ、日を送るに至るべし。あはれ、人生の不幸ならずや。

婦人は、遺傳の習慣にや、概ね、滋養物を好まざるが如し。たとへば、牛乳は臭しとて用ゐず。脂肪質に富むものは、淡泊ならずとて斥け澱粉のみにて生を有たんとするを以て、一朝人の妻となり母となるや、體力俄に衰へ、氣力忽ち減じて、以て、子孫も少く、勤勞にも堪へず壽命さへ長からざるに至る。讀者、各々己を省れば、思半に過ぎん。



川崎先生に呈して婦道の一端を論ずる書

永潜生

拜啓半簾紅雨落無聲、春愁、いづこも御同様と存候。扨、過日は、態々御高著を御下送被下、即夜拜讀三遍五遍、誠に以て、敬服の至に存候凡そ、今日に於て、至難の事を數へ候はゞ、吾邦に於ける現今の女子德育の如きは、慥に、其の一に居る事と存候。何事も、過渡紛亂の時代とは申しながら、極端に云へば、女大學一本槍の姑と、フランス語を喋べる嫁と、同居せねばならぬ事に相成候。家庭をして、よく、和樂調和せしめんことは、難中の難事と存候。今、謹で、御高著を拜見致候所、論旨正確、彼れに泥まず、此に偏せず、懇ろに、婦道の中庸を說きて、日本固有の精華を發揮し玉ひ、剩さへ、金玉の文字簡潔平易にして、而かも、音調和暢人をして卷を終ふるを覺えざらしむるもの有之候は、かへすがへすも感佩の外無之候。某博識の新著大學出で丶數年ならざるに、已に、十四版を重ね候樣なる今日に於て、如斯御著に接し候は、さながら、空谷に跫音を聞くが如き思ひ致され申候。此の書、向來幾多賢母の母となり、良妻の妻となり、日本の女子道德に於ける好個の指南車と相成可申事は、今より欣喜に不堪次第に御座候。批評を試みよとの仰せに候へ共、未だ、子なき妻なき黃口の一書生に候へ者、固より、如斯至重の問題に容喙すべき資格も無之、是れ丈けは、平に、御宥しを玉はり度候。去れど、親あり兄弟ある身の、おぼろげながら、家庭てふ事に關しては、少しは、經驗も可有之

かと自信仕候につき、左に思ひ付き候件々、一二御聞に達して、折角の御思召に答へまつるべく候、併し、之れとても、固より、机上の書生論にて幸に、御譴責を免れ候はゞ、何よりの事と存候。

尙、又、所々、赤インキにて汚し候段は、御思召に甘へたりとは申せ、餘りの事と、我ながら、其の大膽にあきれ申候。金玉の文字を損せし事、多々可有之候はむも、玉敷く庭に散りかふ紅葉とも見そなはして、深くは、御咎め被下間布候。

第一　婦人をして自重の心を起さしむる事

白詩に人生莫作婦人身、百年苦樂由他人とか申す句之有候は、東洋に於ける婦人の地位の、如何なるものなるかを歌ひ得て、餘蘊なきものかと存候。陰陽說を基として成れる、支那の儒敎に於て、女子を律するには、恒に、消極てふ墨繩を以てせしは、理の正さに然るべき事にして、婦人は、恰も男子の爲めに造られたる玩弄物の如く、茲に於てか、今日漢宮人、明朝胡地妾とあり、願　爲黃鵠兮歸故鄕との哀聲も出て、五千載因襲の久しき、其の足と共に、其の心も起つこと能はざるに至りし支那婦人を思へば、實に、氣の毒の極と存候。扨て、儒敎に則れる吾邦從來の敎（少なくとも儒敎佛敎）は、如何なる眼を以て婦人を視しかと云へば、遺憾ながら、或は、同樣なる色眼鏡を以てせざりしやを、疑はざるを得ざる次第に御座候。御高說の如く、幸ひにして、吾邦には、固有の美はしき風敎有之、其の弊、彼が如く甚しからざりしにもせよ、尙は、女子は三界の枷とか、或は、女子は生來罪業深き者なればとて、秀靈の地には女人禁制の札を建てられし等は、吾等の常に聞きなれし所に候。若し、一觚尙ほ全弓を相す

べくんは、吾邦從來の女子に對する觀念の如何なりしかは、想像するに餘りある事と存候。要するに、婦人は男子に比し、一層劣等の者と見做され、女子も、亦、甘んじて之を自認し、其の極、保護の力は變じて抑壓となり、柔順の德は變じて卑屈に陷り、極端なる男尊女卑の說は、到る所に、其の暴力を逞うせし事と存候。斯く、コゞメられ押し込められし、なよやかなる室咲の花より、美はしき果を望むは、迚も、無理なることにして、決して、婦人のみを咎むべきにはあらずと存候。固より、女子は、其の精神に於て、其の體力に於て、到底、男子と競爭すべき者にあらざる事は、明かなることに候へ共、去りとて、女子は、又た、男子の有することを能はざる一種獨特の長所を稟け居り候者にて、之れ、以て、女子の男子に傚るべき價値ある所、女子の男子に依ると共に、男子も、亦、女子を賴まざるべからざる所以と存候。去れば、女子たる者は、進んで、其の長所を發揮し、其の務を果たすべきは、己が本然の天職なることを自覺し、大に、自重の念を惹起し着々として、其の所信を行ふべき事は、最も、大切なることにして、殊に、吾邦の如く、從來消極的の敎のみ注入せられたる女子にありては、尙更ら、肝要なる義と存候。小生は、固より、世の輕薄者流の、所謂男女全權論に左担する者にては毛頭無之、否な寧ろ反對の考を懷き居候者に候。去りながら、御高著にも見へ候如く、國々、夫れ〴〵固有の習はし有之ものに候へ者、西洋人の婦人を戴くの迄でをも、彼是と申す次第にては無之候へ共、例の洋行風吹かすハイカラ黨や、束髮頭のオテンバ連より、斯樣なる大法螺を吹き立てらるゝ事かと思へば、見るさへ胸惡う覺え申候。如斯きは、畢竟

するに、吾邦固有の美徳を壞亂する者にして、其の罪、決して輕るからざる事と存候。況んや、學問界の重鎭たるべき識者にして、敢て、漫りに地下にありて言ふこと能はざる古人の書を品隲し、「貞婦は二夫に見ゑず」とは愚の至りなりなどと揚言せられ候は、抑、何たる事に候や。成程其の人自からは、一個の確然たる主義を有しての上の事とは存候得共、之を讀む者は、決して、豫め皆如斯き定見を有せるにあらず、果して、然らんには、去なきだに混亂せる吾が道德界に、更らに幾多の紛擾を加ふるのみにて、誠に以て、長大息の至に奉存候。去ればとて、又、古來よりの儒敎及び佛敎の如く、全く婦人を度外視致候事は是又た、大なる誤かと存候。要するに、婦人は、高山の嶺にある湖の如くならざるべからずと存候。其の湛ふるに當りてや、清冽澄徹碧の如く鏡の如く、白雲を映じ綠樹を醮し、人をして、神逝きて去るに忍びざらしむるもの有之候。然れども、焉んぞ知らんや、此の裡には、偉大なる勢力の潜めるものにして、若し、其の堤を決して落下する水力を利用せば、巨大なる電氣を起し、器械を運轉し能ふものに候。婦人は、實に、此の風光と共に、此の潜勢力を併せ有せざるべからず。偉人は賢母の膝に生れ、良妻の腕に倚るとは、乃ち、此の言ひかと存候。去れば、婦人は、何處迄も知らざるべからず。而も、知つて而て云はざる者ならざるべからず。婦人の尊ぶべき所は、實に玆にあり。之をして、知らざらしめんとするは、東洋古來の女子敎育にして、知つて而て之を御喋舌りするは、西洋の風かと存候。此の兩者は、共に小生の感服せざる所に御座候。

今、謹んで、御高說を拜讀せしに、深く、此の點

に意を御用ひ被成候ものと相見え候て。従來の女子教訓の書に見らるゝが如き、甚だしき消極的検束無之、頗る中庸を得居候事は、殊に、欣喜に不堪次第に御座候。去りながら、先入は主となるものにて、多年來、只だ、柔順てふ埓の下にのみ養成せられし日本女子の、鳩となることはやさしく候はむも、戀となることは、なかなかに、六ケ敷事かと存候。成る程、鳩の柔和なる愛らしき性質は、非常なる美徳には相違無之候へ共、來るべき劇烈なる社會に處し、よく、其の天職を全うせんには、只だ、之れのみにては不足かと存候。必ずや、温容と威風とを相兼ねし戀ならざるべからずと存候。約言すれば、現時の日本女子に於て、尤も憂ふべき病は、濶の好景戀の温容とを得ざるに非ずして、其の潜勢力と其の威風とを養ふこと能はざるにては無之かと存候。果して、去候はんには、之れに向ひて、最も缺くべからざる良藥は、進取主義積極主義にては無之かと存候。更らに、言ひ換ふれば、絆をしめるにあらずして、今少し絆を弛めることにては無之かと存候。此の點より、忌憚なく御高著を評し候へ者今、一層、此の良藥を御加味被成候はゞ、錦上、更らに花を添へ申さずやと存候。勿論、吾邦には、吾邦固有の精華有之、敢て他に求むるに及ばず、其の粋は、或は貝原先生一編の女大學に盡き居候事かとも存候へ共、同じく、自然の美にても、春は花秋は紅葉と移り行き候如く、其の精華の發揚も、時代によりて變遷せざるべからざるは勿論の義と存候。然らば、所謂、其の進取主義積極主義とは如何なるものなりやとの御尋ね有之候半も、之は、只今一言にては申上兼ね候。要するに、女子は女子として至重の天職あることを自覺し、自重自信、其の識

見を高尙にし、其の眼孔を大きくし、只だに一身一家の小を顧みるのみならず、國民として、はた、人間として、己れは如何なる地位に立てるかを知らしむることに有之べくと存候。即ち、風にえ耐へぬ室咲の花とならずして、御高著に見え候通り、氷雪を淩て、凛として犯すべからざる白梅の花となることにて候。おのれ、嘗て、朝顔を愛づるあまりに、

あやにしき織りなすのみかあか〳〵に離さそふ
る朝かほの花

とよみ出で申候。措詞拙惡、固より、歌をなさず候へ共意は、乃ち、玆に有之候積に御座候。

以上は、只だ、一般良家の子女に對する一片の婆心に御座候。若し夫れ、片言交りの外國語を喃々しつゝ、自轉車にて遠乘を試みらるゝ才媛も尠なからざる今日、此の方々に向ひての修身は、固より特別を要し候事にて、玆には、敢て申上ぐべき必要なき事と存候。

（未完）

學術の研究につきて

眞邊榮次

人文進步し、社會の事情益々複雜なるに從ひ、愈々廣く諸方面の智識を要するに至るは、理の當然なり、獨り自國の事情に通曉するを以て、足れりとなすべからざるのみならず又、各國の事情にも通ぜざるべからず。從つて人の人たる道を知り、國民の國民たる本分を辨へ時に、女子にありては、溫順貞淑の美風を養ひ、以て良妻賢母たるの美質を發揚し、其の責任を完うせんと欲せば、勢ひ數多の學科を研究せざるべからず、これ、今日、諸嬢が大に困難を感ぜらるゝにも拘はらず多くの學科を研究せざるべからざる所以なり。加之、諸嬢

は是等衆多の學科を研究する以外に、女子として履修せざるべからざるもの多々あり、且、其の學修の時期は、之を男子に比し、比較的短少なるにあらずや、實に、女子の負擔大なりと云ふべし。併しながら、其の學科目は、たとへ多きにせよ。又、如何に困難なるにもせよ。適當の研究法を採用せば、獨り苦んで自暴自棄するの必要あらんや。却つて、中心喜び自ら進んで研鑽講究せんとの念慮、自然に萠發し來るべし。果して然らば、其の研究の方法は如何、これ予が今述べんとする處なり、凡そ、如何なる學問を問はず、これが研究をして、最も有効に、且、最も正確を期せんと欲せは、先、これが研究の方法を考へざるべからず。然らざれば、無益の時間を費し、且、其の結果も亦其の勞に比例せざるのみならず、却つて、腦を痛み憐むべき悲境に沈淪し、從つて人生の本分を完了すること能はずして已まむ、例へば、昔、漢學を研究せられし人々を見よ、普通の學識を有する人にして、尚、小くも十年の日子を積まざれば、斯學の一斑を窺知することを得ざりしにあらずやこれ、全く、其の研究法の迂遠なるが爲なり。然るに、近時に至り、稍、其の研究法の面目を改めしがため、之を昔日に比較すれば、時間を費すこと寡少にして、其の効果は、却つて、多大となれり、果して然らば、かゝる經濟的研究法とは何ぞ。予の所謂科學的研究法是なり。

科學的研究とは何ぞ。之を説明せんとするに先だち、一言、科學の意義を解説せざるべからず。「ラッド」博士の語を借りて之を云へば、科學とは精密餘蘊なきの觀察により、種々の現象を彙類し、其の間に存する一種の關係を發見し、之を確實にし、以て之を説明し、吾人の經驗を組織するを云

ふ。即ち幾多の事實を觀察し、其の種類の相類似し、若くは、同一のものは之を綜合し、一個もしくも數多の原理の下に歸着せしめたるものなり。換言すれば、一類の事物に關する智識を概括し、該類の事物全般に關する法則規律を立てたるものなり。

科學の意義上述の如し。而して、科學的研究法とは此の意義に於て、凡ての學術を研究するの謂なり。今、此の研究法をして、一層、明晰ならしめんため、二三の例を擧げ之を說明せむ、

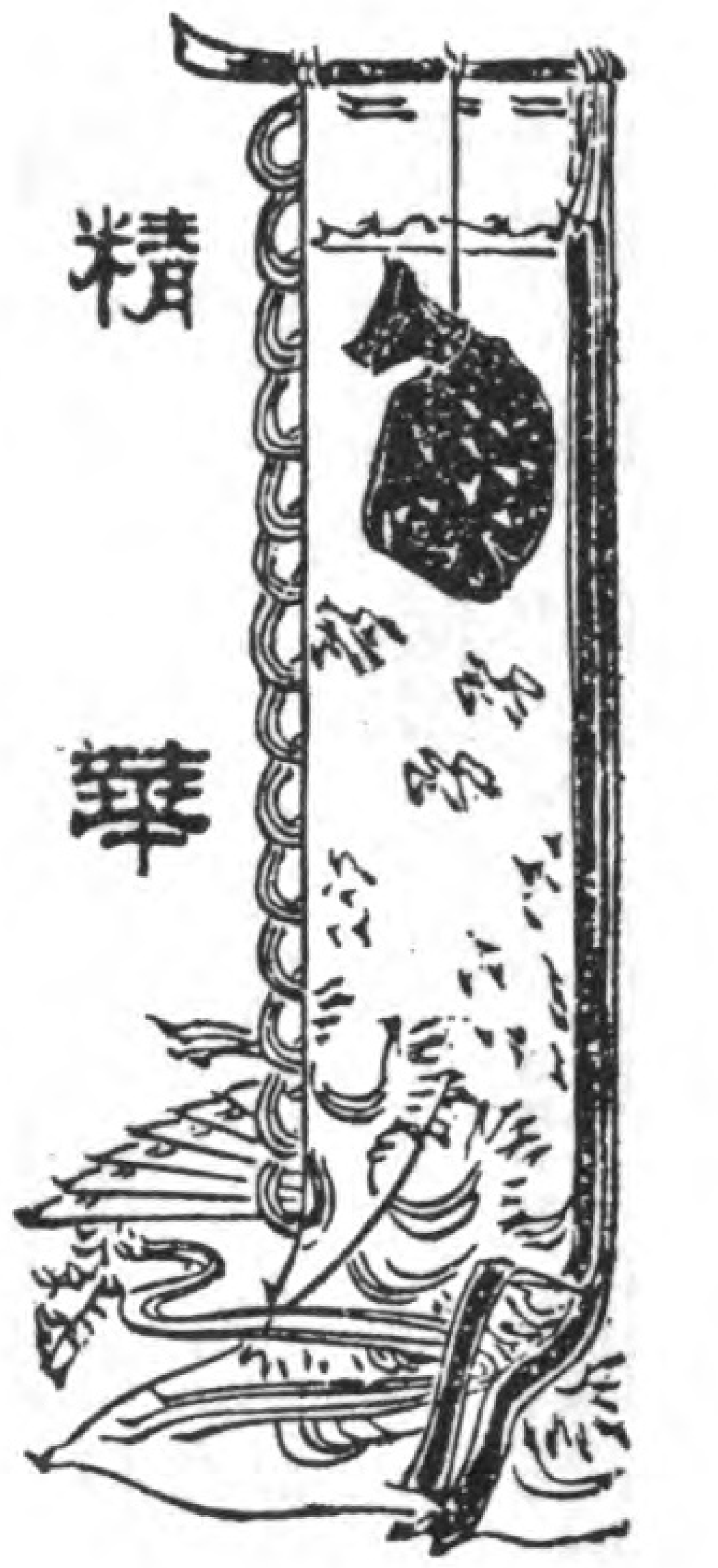
今、吾人が歷史を研究するに當り、必要なる着眼點は何ぞと云ふに、事實の原因結果を繹出するにあり、而して、其の原因には遠きあり、近きあり、又、單純なることあり、複雜なることあり。或は必然なることあり。或は偶發なることあり。而して、今譯出せられたる原因結果は、十分眞實なりや否や、又、其の結果は誤謬なきや否や、倘、一歩を進めて云はゞ、果して、其の原因が眞實にして、結果も亦眞實ならば、他にこれに類似せる事項はなきか、若ありとせむ、其の差異を來せる原因は何ぞ。而して、又、同一の原因ありと承認しながら、往々反對の結果を來せることあり。これ、やがて、自家の謬見を證する所以にして、須らく反省探究すべきなり。其の他一切の學を研究するにも、此の態度を採らば、大に心力を鍛練し、理解力を增加するならん、今、地理學につきて某地の氣候を研究するとせよ。先づ、如何なる點に着眼すべきか、斯る際に當りては、氣候の差異を生ずる原因を十分探究すべきなり、例へば、緯度の高低と氣候との關係、土地の高低と氣候との關係、山脈の陰陽と氣候との關係、洋流と氣候との關係風の方位と氣候との關係等は、須らく着眼すべき

點ならずや。

斯の如く工夫を繞らし、精密餘蘊なく考察研究せば、其の得たる智識は、永遠に保持され、而も、確實にして實用に適すべきなり。然るに、世人、動もすれば機械的研究に滿足し、秩序もなく系統もなく、支離滅裂に研究し、意識の內容を不整頓ならしむるものあり。實に思はざるの甚しきものと云ふべし、たとへ、一時之を理解し記憶するも、時の經過と共に消滅し、殆ど痕跡だも止むる能はざるに至らむ。これ、或は名稱を暗記せんとし、或は章句を記憶せんとする弊に歸因するものにあらずして何ぞや。故に、斯る研究法によりて得たる智識は、たとへ、精密微細なるも、學問研究上殆ど價値なきものなり、世に活用の才なきものを目して字引先生と名づく、これ、研究法を誤れる結果ならずんばあらず、之を要するに、科學的研究とは多くの事象を見て、之を各個獨立無關係に生起するものとなさば、一般普通の理法に從ひ、生し來るものとして考ふるにあり。故に、何某の事象起らば、此の事象は何故に起りしか、何故に消滅せしか、等の如く、其の根本に溯り、其の眞理を追究探知せずんば已まざるに在り。請ふ、諸嬢それこれを努めよ。

人高顯に居れば、卑下の艱難を思ひ、飽暖に居れば、饑寒の困厄を思ひ、安逸に居れば、勞瘁の當に休すべきを思ひ、明哲に居れば、愚暗の恕すべきを思ふ。（徐養編）

人を責むるの心を以て己を責むれば、則ち、過ち寡く、己を恕するの心を以て人を恕すれば、則ち、交を厚ふす。（李邦獻）



新婦某に與ふる書

江川坦庵

一夫を天と致し候事は、誰も辨へ居候へば、天を怨み、天を厭ひ候迚、逃可申樣無之候。是等の義に心を付、能々、相事へ可申候。凡、門内の治は、恩義を掩候故、心易立ても出來致し候間、敬愼專一、心掛け可申事。

一男は、剛を以て德と致し、女は柔を以て道と致し候事に候間、身を修め候には、敬ひにしくはなく、つよきを避け候には、順にしくはなき事に候故に、敬順の通は、婦人の大禮に候、偖て、誰も、最初嫁候節は、何樣にも、厚く心掛く可き積の處、追々居馴候にしたがひ、前にも申候、心易立と云者、出來候間、朝夕に心を用ひ、聊にても、差出ヶ間敷事、或は、不足ヶ間敷事共、決して有レ之間敷候。總じて、足ることを知り、勘忍を專一とし、言行とも、都て、ひかへめ〳〵に致し可レ申、凡、事に直なると曲れるとは、あるなれども、それを其の儘に、是れは直なり、是にては曲れるなり抔と申時は、自然の聲高にもなし、果は、夫婦爭ひにも至り申候。畢竟は、平日前條の次第を、等閑て、心に掛けざるよりの事に候。柔順婉曲にして、夫に從ふは、女の道と申事を、心得可レ申事。

一夫、留守の節、客來ること有レ之ば、夫不在の旨申斷るべし、若し、無據事にて、座敷へ通し候はゞ、誰れにても、側に差置、差向にて、

話不レ致樣精々心付可レ申候。凡、物は、腐候より蛆を生じ、人も疑れず候得ば、讒にも入り不レ申候。能々心得可レ申事。

一僅ある功に誇り候ば、敎ある婦人の常にて、其の心の底も見られ、恥べきことに候。よき取計の義有レ之候とも、自負の體なく、或は、不行屆無調法抔と被レ申候節は、我身を顧み、聊か、不平に存じ申間敷候。それを口數多く、彼是辨じ候へば、非を飾り候にありたり、却て他の厭惡を來し候事に至り可レ申事。

一衣服、其の外、都て、手掛け候者へは、念入可レ申事。

一下婢共、告口等一切取用申間敷、己れの長を說き、人の惡きことをわげ候樣ある物語を、決して、致し申間敷候事。

一其の家政の儀、他家、幷に里方の振合を例に引き、彼是申間敷、且つ、自分の申出候通りにあらざる迚、不快の顏付、又はブリ〳〵致し候事共、甚敷、夫の氣色に障り候ものに付、都ての事に、此の心付肝要と心得可レ申候、且、夫に對し候て、一旦さからひ候共、終には、致しかたなく候者故、寧ろ、最初より順從致し候方、女の道にもかなひ、われにも由なき恚恨の念慮を起さず、兩全の道と心得可レ申事。

右は、此度緣付候に付ては、最初よりの心得方、大切に候間、差遣すものなり。

喜代女

田山とり子

越後國古志郡田中村の百姓久右衞門が妻、喜代女といへるは、舅、久左衞門につかへて、いとねも

ごろありき。久左衛門といへるは、百幾歳といふ、世にも稀なる長壽を保てる人ありしが、九十七八歳のころまでは、行歩も、いさゝかおからかなひけれど、隣村なりける菩提寺に詣でゝ、香華を供ふるを、缺くまじき日々の勤としけり。其の道のほどのおくりむかひは、皆、喜代女が心づくしなりき。夏の暑き日には、傘をさゝげ、冬の雪の日はにわが身さきだち行きて、道をふみならし、然る間にも、種々の談話などして、伴ひ行き、斯くして、一日も怠ることなかりき。百歳を超えて後は、さしもの久左衛門も力かなはず、例の勤を果さずなりて、常に、その事をなげきければ、喜代女は、朝夕、持佛の前に燈明香華を備へ、心のまゝに看經せしめて、せめてもの心やりとせしめぬ。少しの間暇だにあれば、舅のかたはらに侍り、何やかや、あとさきなる物語にも、一々、こゝろよく應答して、其の心に順ひぬ。ねどころなども、夏は涼しき方にかまへ、冬は、まづ、わが身の暖温にて夜具をあたゝめ、さて舅をねさせけり。年老のねざめがちにて、夢物語など言出せば、機嫌よく之に應じ、短夜の折などは、ねぶらで曉にいたることも、度々ありきとぞ。夫は病がちにて家にのみ籠り居、子は村役をつとめて、其方にのみありき。されば、生活の道は、たゞ、この喜代女が手ひとつによりて營まれけるが、さるいそがしき中に、夫にも心ゆかぬふしなく仕へ、舅にも、斯くばかり孝養を盡しゝこと、いかに、うらやましき極ならずや。若きより身のまはり、其の他、總べて、人の目にたゝむことを嫌ひければ、かばかりの心づくしも、世に知られざりしが、舅、耳いたく近うありてより、いと聲高に語りかはしゝかば、近きわたりの人々、遂に聞知りて、其の事

領主の耳にも達し、安永五年二月、銀若干を賜はりきといふ。

迷ひに深きものは、吉きといへば心を心よくし、悪きといへば、心を心悪くす、よしあしは我に有て人に非ず。

（穴穂部の皇女）

一利を興すは一害を除くに如かず、一事を生ずるは一事を減ずるに如かず。

かみつかたは必らず無理を宣ふものと知らばうらみなし。しもつかたは必ずおろかなるものと知ればわれにいかりなし。

（和論語）

夫れ女はかたちのよしあしをしらず、言葉すくなに愛嬌あるこそ第一の女なれ、をのこはうちに、文字ありて人のうわさの善悪いはで、みだりにいかりのなきを第一のをのこといふなり。

（維　子）



家政

仕付方

赤堀又次郎寄贈

十四　御朋輩の事

然る方の御みやづかひには、かならず、上下に朋輩たちあふ中ぞ、こゝろをそへらんずるものに侍る。わが身よりあまりおとなしくおはしまし候はんずる御方々には、如何ほども、ところおき、何事をも、問ひまゐらせ候ふべし、また、御年などわかうくだりたる人には、御言葉をそへ、いたりなきことを教へさせおはしまし候へ。いたうあやしきめしつきはしたわらなどにも、御心をそへ

て、よくめしつかはれまゐらせ候ふやうとおほせあはせられ候ふべし。さりとて、下子などに、うちとけて、うちむかひ給ふまじく候。いかに、御前にて、げに〳〵しくはかりよきさまに、うちいふなれど、かならず、又、人にあふたびごとに、そのつぼねにこそとはおほせごと候ひしなど、いひ沙汰するものに侍り。たちかへり見ざめするは、かならず、下子のならひに侍り。いかにも、うとく、したしう召しなさせおはしまし候ふべし。

十五　人めしつかふ事

人を召使ひ候はゞ、如何ほども、御おんをたび候ふにそへて、御なさけをかけさせおはしまし候へ。その人、あながちに、其の御志を知りまゐらせ候はねども、おのづから、見聞およびても、かならず、まゐりつかふるならひにて候。たゞ、いかにも、御心をおかせ給はで、御恥候ふべきは、めしつかふ人にても、其のひとがら御うわさをも申し沙汰するものにて候。いかなる物狂にても、かりなる賓客、うとき人に一日二日、または、十日廿日さしあひたるほどなどに、のこりなく見あらはさるゝことはなきものにて候。たゞ、朝夕なれつかうまつる人々、御うわさを、とかく言沙汰するにぞ、よきもあしきも、よにひろまりて、御心ばせ、たちゐおきふしの御はたらきは、よく聞え候ふものに侍り。いかにも如何にも、御はゞかり候うて、御心をおかせ給ひ候ふべし。

十六　朝おきての事

まづ、あしたは、よきほどに御覺にならせおはしまして、御手水さるるかたのやうにして、御行なども、あながち御いそぎ候うて、まづ、家あるじも、みやづかへびとも、御髪ときくだして、御鏡にむかはせおはしまし、よるは、かならず、いね

などわしからねども、人の御手まさぐりにも、まゆなどのちるものにて侍り。われは、看經など、心にいりぬるとて、おそくかはなど御らんじ候はば、かならず、ばけもの丶やうなることあるものにて候。かゞみは、天照大神の御かげをうつしぬるものなれば、あした、とくおきて、手水して、まづ、見るべきものなり。一は神明をおそれ、一は、見どころあるゆゑに侍り。御心得候ふべし。

婚禮式（前承）

有住常子

御酒をもち出づる、御双方の下座、御袖わきにすえるなり。すべて通の者二人の時は、右側は左膝、左側は右膝を立て互に、中の足より三足引き、双方向ひ合ひの様になし、御勝手に入るなり。御本酌、加、御土器、三方、御銚子を組付け持ち、加提子を持、相並び出づる。加は、御次の間、しきゐ外に扣座し、右手に、つるの眞中を持ち左手は膝側につき扣へ、本酌は、聟君の前に持參り、上の土器にて二獻差上げ、下座に二膝引き、右に廻りて、加に立つ加の者も、右膝に立ち、しきゐ内に入り、双方向ひ合ひ座し、本酌、右手にさく金の所を持ち、左手にねこ足の所を持ち、銚子をすすめ候時、加へて、兩人共、右膝に立つ互にまるく廻りて加の座に扣へ本酌は、聟君の前に參り、一獻差上げ、其の儘三方へ銚子組付け、右に廻りて、御緣女の前へ持參る、二獻差上げ、前の如く双方加に立ち、加へ候て參り、一獻差上げ少し下座に下り、中の土器に組直し、其の儘、御緣女の前にすゑ、二獻差上げ前の如く加に立ち加へて參り、一獻差上げ、其の儘、三方へ銚子組付け、右を

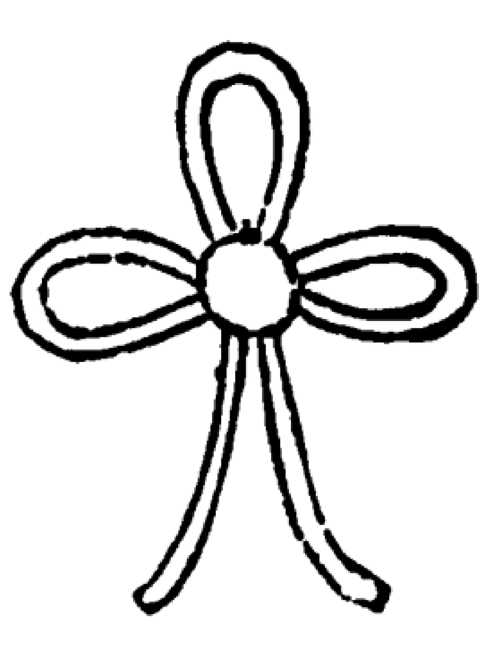
膝に立ち大きく廻り、聟君の前へ持參り、其の土器にて、二獻差上げ、前の如く加へて參り、一獻差上げ、少し下座に下り、したの御盃と組直し、其の儘、聟君の前にすゑ、二獻差上げ、加へて參り、一獻差上げ、其の儘三方へ銚子組付け、御緣女の前へ持參り、其の土器にて二獻差上げ、前の如く加へ、參り、一獻差上げ、少し下座へ引出し、御土器組直し、元のとほりに致し、三方へ銚子組付け、本酌、加、右膝に立ち、座敷の眞中に向ひ合ひ、双方すゝみ出で、しきゐぎはへんにて、銚子の口のあふ樣に致し、加は右に廻りて、本酌のあとに付き、大結にて御勝手に入る、通の者出で、滴を引き、御膳部等、皆引き、御色直し小袖廣ぶたにすゑ、かよひ持出づる。聟君の介添、次の間へ立出で、受取り扣へ、通は御勝手に入る、御緣女の介添、御次の間へ入る御小袖受取り、御緣女の御前へ持參り、御披露なす。其の時、御双方御一禮終りて、次へ引き、通に渡し本座につく、御樣子見斗ひ、兩介添御次の間へ立出で相互の禮有りて、上座にむきかへ、恐悅申上げ置きて御ひらき申上ぐ。其の時、御待上臈、御案内にて御佛間御拜禮終りて、御双方樣、一先、御休息相なり候なり。

上巻むすび

石井泰次郎

第四 貞丈翁隨筆（前號の續き）

結帛式



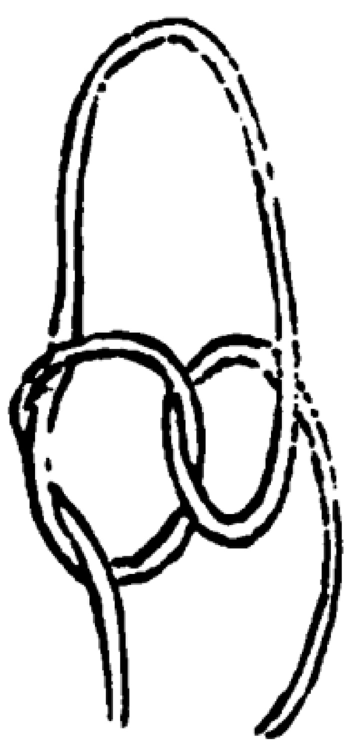
（三十二）同一種　ムスビカタノタガヘルサマ

是は、正しき結様を近き世になりて、誤りて、かくは結びそめしが、今に傳はれる結ざまなり。其のあしき筋を直さんがためにさながらにあげおきつ。正しき方と合せ考ふべし。

結様は、まづ、正しき方の如くなして、左に一つ輪形をつくり、右紐先を一度下の方へのばして、下の方より、左の輪形に掛て右の方へとくぐらせ、其の紐の元の方の下にと、右の方へ出して、輪形になりたる時、又、其の内へと右紐先を掛て、下の方へと通して、左右の間より、眞中の輪形の端々を引て出すべし。

第一圖　第二圖は前條と同じ。

第三圖



第四圖は前條の第五圖の同し。
又、次々も、前條と同様なれば、圖をはぶきつ。

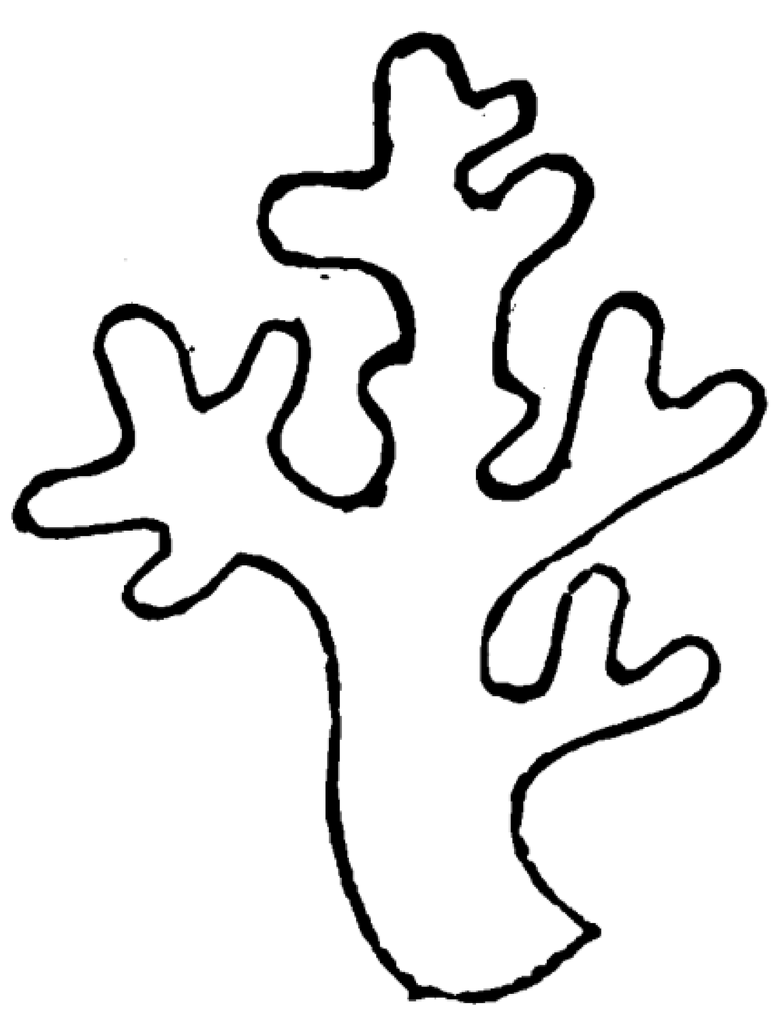
たちぬひ

羽子板をしゑ

西山たい子

寶舟のつゞき

珊瑚珠



之は厚紙を上圖の如き形に切り、之には綿を入れず、緋縮緬の切れをすぐに例の如く裏にかへして張つくべし。

大きさも此の圖によるべし。

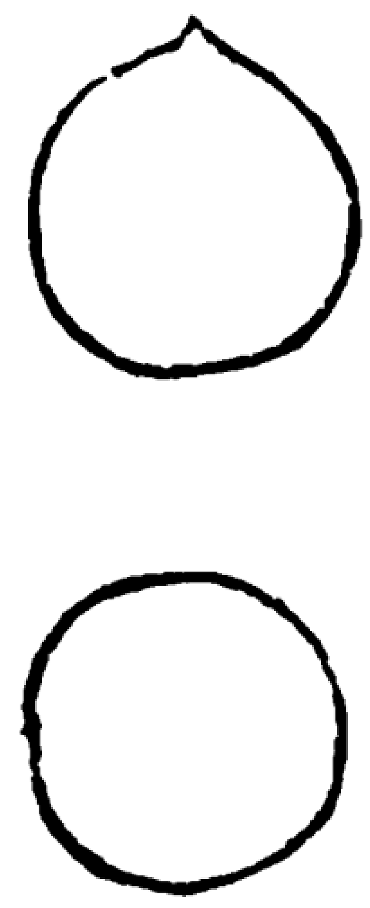
丁子



丁子形は上圖の如き形に厚紙を二つ切り、之に赤、黒等の錦もて、綿少許を入れてつくるべし。但し、同じむきのものをつくらずして、左右ちがへてつくるべし。さるは、船に積む時に、ぶつちがへに、即ち、下圖の如く格合よくするがためなり。



寶珠



寶子の珠には錦小許を入れ、白縮緬やうの切れにてはり、左圖の如く赤、青、紫等の畫具もて色どるべし。

その圖



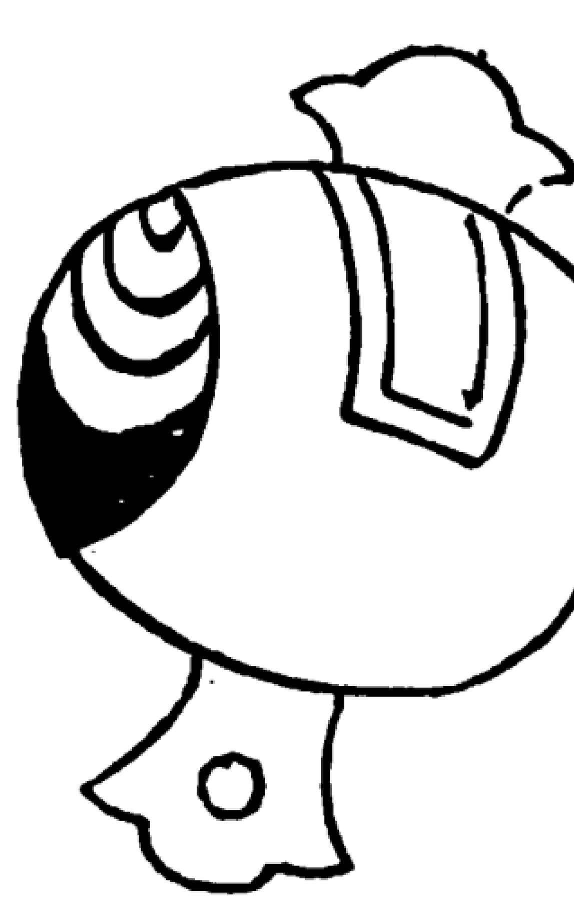
但し、二つつくりおくべし。

小槌



左の圖の如く厚紙を切り、ロの印あるものに綿小許を入れ、色のかはりたる錦切をはりつけ、ハの印のものにも赤き錦切はりつけ、柄には緋縮緬、イの印あるものには白ちりめん等の切に、綿を入れずに、すべてはりつけ、ハ印のものは、ロの上に負はせ、イと柄とを其の下にはりつけ、小槌を赤、青、金、紫等の畫の具もて色どるべし。

その圖



大きさも大方此の圖に習ふべし。

だいどころ

鱚と筍の吸物

鱚の鱗を去り、三枚におろし、能く洗ひ、鹽をあて置き、後水氣を去り、之を結びて、ざつと湯煮し、又筍のやはらかきものを、湯で、穂先の所を薄くきざみ前の、鱚を共に、清汁の中に一寸いれ、椀に盛り出すべし。吸口には、木の芽杯宜し。

土筆のむきみあへ

土筆の、穂と袴を去り、ざつと湯煮し、苦味を去り、一寸位にきりて、又、むき蜊を湯煮し置、木の芽をとり能く洗ひ、水氣を去り、摺鉢にて、能く摺つぶし、味噌を漉して摺り交せ、砂糖少量を加へ、酢にて能程に薄め、前の土筆と、むき蜊をいれて、能くかきませ、用ゐるべし。

筍海苔酢味噌

是は、げんのうと、云ふ位の、短かくやはらかなるを湯煮し、能程にきり、淺草海苔を火どりて、こまかにもみ、味噌と、一所に能く摺り交せ、酢にて、能程にゆるめ、あへるなり、唐がらしを、少し、いるゝも宜し。

筍浸物

能く湯でたる、筍の、穂先の所を、薄くきざみ、胡麻醤油、山椒醤油杯、かけて、用ゐる。
又、筍の穂先の、白き、あま皮ばかり湯煮して、細かにきざみ、からし酢味噌、又は、三杯酢をかけて食す。

筍田樂

軟かき、筍の皮と、本とを去り、斜にきり、青串にさし、程能き火にて、兩側より燒き、木の芽味噌、又は、唐からし味噌を、兩側につけ、ざつと火にあて、食すべし。



國文學講義

紫式部日記講義(十二)

井上頼文

二十六日、御たきものゝあはせはてゝ、人々にもくばらせたまふ。まろがしゐたるひとびと、あまたつどひたり。

釋義

○二十六日　八月の二十六日なり

○御たきもの　御薫物なり。香氣の高き薬品を調合し、それを粉にして、甲香と云ふものを入れてねりたるものなり。これを、煉香とも、あはせたきものともいふ。焼て、その香を、頭髪、衣服等に染みこます料に、多く用ゐたり。拾芥抄に、薫物の方、第二十五とある條に、五方とて、黒方、侍從、梅花、荷葉、菊花、盧橘などいふ薫物の調合方を記せり。今、その内、黒方の調合法をあぐべし。

黒方

沈　四兩　丁子　二兩　甲香　一兩
二分　薫陸　一兩　白檀　一兩　麝
香　二分と、見ゆ。

○あはせはてゝ　種々の薬品を調合して、丸め終りてあり

○まろがしゐたる人　先日より、この合香を、丸めて居たりし人の意なり。まろがしとは、丸薬をまるめる如く、練りたる香をまるめることなり。

譯解

八月の二十六日、御薫物を調合し終りて、女房たちに、それ〴〵分配し給ふ。

さて、その御合香を、先日來より調合して、しめて居たりし人々が、今日も、また、そこに、大せい集り居たり。

漢文學講義

佐々木天游

記笠原卜傳事

中村栗園

土佐人。笠原卜傳。善ニ擊劍一。自號ニ其宗旨一。曰ニ無手勝一。嘗游ニ近江一。舟渡ニ矢走一。同載六七人。中有ニ一士人一。年三十七八。以ニ劍術一自誇。傍若レ無レ人。卜傳曰。我亦擊レ劍。然不レ欲レ勝レ人。欲レ不レ負レ人耳。士曰何言之遜也。因叩ニ其宗旨一。卜傳答以ニ無手勝一。

士曰果無手勝。則子所レ佩劍實爲ニ長物一。但不レ知無手而能勝否。卜傳曰。我劍本爲ニ活人劍一。雖レ然對ニ惡人一。則變爲ニ殺人劍一矣。士聞レ之大怒。叱ニ舟子一曰。速達ニ舟于レ岸一。我將ニ與レ渠決ニ勝負一。卜傳指ニ一孤島一曰。彼地可。舟已達レ島。士一躍上レ岸。拔ニ長劍一曰來。卜傳曰。臨レ事寧靜。我家法也。徐々攝レ裳。脫ニ兩刀一付ニ舟子一曰。何用レ劍爲。因親操レ棹立ニ舷頭一。撐レ岸開レ舟。呼曰盍ニ游泳來以決ニ勝負一。無手勝之秘是己。士頓足怒罵。而舟已杳矣

土佐の人笠原卜傳擊劍を善くす。自ら其の宗旨を號して無手勝と曰ふ。嘗て近江に游ぶ。舟、矢走を渡る。同載六七人。中に一士人あり。年三十七八。擊劍を以て自ら誇る。傍ら人なきが如し。卜傳曰く我も亦劍を擊つ。然ども、人に勝を欲せず。人に負ざるを欲するのみと。士曰く、何ぞ言の遜なるやと。因りて其の宗旨を叩く。

卜傳答ふるに無手勝を以つてす。士曰く、果して無手勝あれば、則ち子が佩る所の劍、實に長物たり。但知らず、無手にして、而して能く勝や否やと。卜傳曰く、我が劍は本活人劍たり。然りと雖も、惡人に對するときは、變じて殺人劍とあると、士之を聞き、大に怒り、舟子を叱して曰く、速に舟を岸に達せしめよ。我、將に渠と勝敗を決せんとすと、卜傳一孤島をさして曰く、彼の地可ありと。舟已に島に達す。士一躍して岸に上り、長劍を拔きて曰く來れと。卜傳曰く、事に臨むで寧靜なるは、我が家法ありと、徐々裳を攝げ、兩刀を脫し、舟子に付して曰く、何ぞ劍を用ゐるをせむと。因りて親ら棹を操り、舷頭に立ち、岸を撐き舟を開きて曰く、何ぞ游泳し來りて、以つて、勝負を決せざる。無手勝の秘は是のみと、士頓足怒罵して、而して舟已に杳かなり。

笠原卜傳の事を紀す。紀事は記又は志に同じく、文體諸式中の一つであります。一體、昔は、史官と申す者がありまして、其の當時の事を記すことを、掌どりて居ましたけれども、耳目の及ばざる所のものは、遺して記しませぬことがあります。ソコデ、文人學士が、自分の見聞することがありますと、手に隨ひて記錄して、歷史の遺忘を補ひ、或は史官の採擇に備へたものであります。ソコデ、紀事と云ふ名目を付けましたもので、文體論にも、紀事者。記志之別名、而野史之流也とあります。土佐の國の人で、笠原卜傳と申します人は、劍術を使ふことが上手でありまして、（善はヨシスルことにて、上手と云ふことあり。）自分から自分の擊劍の流義（宗旨、宗は流派所レ出云レ宗と申しまして、本と云ふことあり。旨はムネなり。ソコデ茲

所にては、宗旨二字で、流義と云ふことゝ心得べし。)を名けまして、無手勝流と申して居りました。(無手勝は、刄を持たずして、素手にて勝と云ふ程の意なり。)が、嘗、マヘカド或時に、近江の國に游歷致しまして、舟に乘りて、矢走の渡を渉りてをりましたが、丁度、同じく舟に載りてをりますものが、六七人でありましたが、其の乘合の中に、一人の侍がありましたが、其の年頃は、三十七歳か、三十八歳か位の人でありまして、劍術を上手に使ふと謂ふことを以つて、自分で自分を誇り自慢を致しまして、傍の當りに、誰もをらないかの如くに、遠慮會釋もなく、自分は、中々の劍術の名人ヂヤと自慢して、傍若無人な擧動を致して居ました。ソコデ、卜傳も、少しく片腹痛と思はれましたものと見えまして、申されますのには、我自分も、亦貴君と同じく劍を擊ち使うて、矢張劍術者

である。シカシナガラ(然は、反二上文一而月發之辭と申しまして、轉語であります。劍術者である。サレドモと、上文を轉ずるの氣味なり。)人に勝ちて、人を打負すことを希望せずして、タヾ合手の人に、負ぬことを希望するバカリノコトヂヤと申されました。(耳は歇語辭にして、コレバカリヂヤと云ふ氣味なり。)ソコデ、其の士人が申しますのには、何ナントシタ御前の謂ふ言は。鎌遜な辭か。大層鎌遜するではナイカと申しまして、(何は少しく怪み問ふの意を、含みてをります文字、ナンチフ鎌遜な言かと謂ふ氣味なり。茲所の也字は。決語にあらず。)サウシマシテ、其の卜傳の劍術の流義は、何と云ふ流名であるかと、叩き尋ねました。ソコデ、卜傳が返答されまして、私の劍術は、無手勝流と申す宗旨であると申されました。ソコデ、士人が、又、申しますのには、果してキット、御

前が言うた通りに、刀を持ぬで、素手で、人に勝つと云ふ無手勝流あらば、即、ソレナラバ刀は不用な筈ヂャから、子其許が、佩び腰にさして居られる所の刀劍は、ホントウニ何の益にも立ぬ。無用な物とあるでアラウ。(長物は、冗物と云ふと同じく、益に立たぬ無用の物と云ふことなり。)但(但ノ字は。前に一説ありて、又別に一説をなさんとするときに用ゐる。轉語辭で、刀は無用の物になるでアラウ。併し、刀なしに、但と、上文を轉ずる氣味なり。)刀なしでは、ドウカシラン。無手の素手にして、サウシテ、能見事に、人に勝つことが出來るでアラウカ。否ドウデアラウカ。と云ふことは知れぬで、思束ない事ヂャと申しました。ソコデ、卜傳が由されますのには、私の刀は、本々活人劍で、人を斬殺す所の刀でなくして、却りて、人を活し助くるところの刀である、左様とは申しながら、(雖ㇾ然は轉語なり。)ソレハ、善人に向っての話で、惡人のワルキ人に對し向ふときには、則ソノトキハ、人を活し助くるの刀が、變じかはりて、人を殺すの刀となるのヂャ。此の刀は、善人は助けて、惡人は殺すの刀ヂャと申されました。ソコデ士人が、卜傳の語を聞きまして、自分を愚弄すると思うたものでありますから、大變に腹を立てまして、船頭を叱しシカリて申ますするには、速にハヤク、此の舟を岸邊にこぎよせよ。自分は、岸に上りて、渠(渠は、彼と云ふことぞ。)彼の男と勝負を決し分タネバナラヌ。ソコデ、早く舟を岸に攪附よと、船頭に申しました。ソコデ、卜傳が、一つの離れ島を指して申されますには、彼アノあれに見ゆる離れ島が、勝負をするの所には宜シイと云うて、冲合の離れ島を、勝負を決するの場所と定められました。舟が、ハヤ其の離れ島

に達して泊ました時は、士人は、卜傳より計略に掛らるゝとは知らずして、大變、腹を立て、氣を燥立て居るものでありますから、一躍ヒラりと、一飛に躍りて、舟より岸に上りて、長き刀を引拔き、身構を致しまして、サア、來りて勝負を決せよと申しました。

ソコデ、其の時に卜傳曰で事ある場合に臨み逢うて、寧んじ靜にして、氣をおちつけて、うろたへ騷がぬは、我が笠原家の家のオキテジヤから、マアまてと申されまして、徐々そろ〳〵と、裝着物の裾を撮げ持ち、(撮は、字書に引持也とありて、カ、ゲモツと)身支度をして、サウシテ、大小兩つの刀を、腰より脫し拔棄て、船頭に付し渡して自分は、無手勝流だから、何ナンデ、刀を用ゐることをナサ、フニ、刀は入用はない。素手で宜シイと申されまして、サウシテ、親ら自分から、船

の水棹を操持ちて、舷頭の舟の舳前に立たれまして、向の士人が油斷して居る虛に乘じて、一撐に、水棹で岸を撐きて、舟を開きて、沖の方に撐出して、大聲を上げて呼び、申されまするには、盍ナゼニ、(盍は、何不也。ナゼニ、カウセヌゾと云ふ氣味あり。)貴樣は游泳し泅いで、此所まで來りて、サウシテ、以つて、我と勝負を分ちつけぬぞや。我が宗旨の無手勝流の極意秘傳は、是已で、カウヂヤ。これが素手で、勝つ。無手勝流の秘傳ヂヤと呼れました。(已は歇語辭にして、所詮ガカウヂヤと云ふ氣味にて、埒を付けて云ふ時に、用ゐる助字あり。)ソコデ、其の士人が計畧に掛られたることを悔しがりまして、足頓足あしずりをして、殘念がり、(頓足はあしずりすること。俗語のヂダンダフムと云ふに同じ。)腹を立てゝ罵り惡口を致しました。サウシテ、其の中に、卜傳

等が乘りて居ります舟は、己に、ハヤ、岸を離れて、杳（遙に同じ。ハルカ。）遙に、冲の方に攪離れて、士人一人を置去に致して、もはや泅いでも追付ことの出來ぬ程、冲合遙になりして、トウトウ、卜傳は、其の士人を無手勝流に掛けて勝ちました、實はアマリ士人が、傍若無人の擧動を惡みて、卜傳先生が、ワザト、奇計に陷れて、置去に致されましたもので、中々面白き話で御坐ります。サウシテ、亦此の文も、輕々に筆を弄して、平易に解りやすき面白き文で御坐ります。此の話は稗史にも、能あることで御坐りますからして、皆樣も、定めて、既に御承知になりて居られますでせう。



和畫通信講義（第九回）

山崎彩娥

山梔子にも、白色なるものなり。これを墨にて畫くには、花、幷に、子房は、淡墨、枝葉は、通常の濃墨にて畫き、後ち、濃墨にて葉脈を入れ、花には、淡墨の隈を施すべし。

彩色にて畫くには、淡き赭墨にて、花の輪廓を描き置き、後ち、胡粉を塗附すべし。尤も、初より、直に胡粉にて畫くもよし。子房は、黃がちの青色、葉は、表は藍がちの青色なり。枝は、赭墨にて、片端、又は、兩端に濃墨を附して、畫くべし。さて、乾きて後、葉脈を濃墨か藍墨かにて入れ、花には、黃がちの青色の、極めて淡き隈をほどこすなり。


一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
廿二
廿三
廿四
廿五
廿六
廿七
廿八
廿九
三十
眼

文林



夕暮に遠き花を見やりて　東久世通禧

松原もひはらもかすむゆふまくれ
はなのみしろき遠のやまの端

落花滿池　佐々木高行

雨にちる花おもしろしみそのふの
みいけましろに波そたゝよふ

花半散　久我建通

みねの雲ふもとの雪とちりにけり
花のさかりもなかはすきけん

嶺上躑躅　水野忠敬

仰きみる高峯のまつの木かくれに
いろうつくしきにつゝしの花

庭落花　長谷信成

日ころみぬ庭の池にもなみたてゝ
はなのこすゑに春かせそふく

春夜　西三條實義

ふくかせもはた寒からぬ春の夜を
月はかすみのころもきてけり

月夜に花を見て　宮地嚴夫

咲にほふはなの下枝にかゝるまて
つきかたふきぬ夜や更ぬらん

井蛙　北郷久政

かはつなく聲のかすかに聞ゆるは
庭のふる井の底にやあるらん

曉落花　大口鯛二

やまの端にかたふく月の影を見て
今はとはなもちりはしむらん

河上落花　遠山英一

河の面のしろくなるまて散にけり
きしへのさくら一木なれとも

行路落花　蜂須賀随子

雲とみてすきにしけさのさくら花
かへる山路のゆきにこそふれ

雨中蛙　近衛貞子

降雨にゆきゝとたえしあせみちに
かはつの聲のみちてきこゆる

故郷山吹　鍋島榮子

一枝はおりてかへらんふるさとの
かき根にさける山ふきのはな

岸頭山吹　前田朗子

垣ねゆく水のなかれもみえぬまて
さきをゝりたるやまふきの花

河落花　南郷柳子

河水になかるゝはなをくみあけて
くれゆく春のかたみともみん

橋下落花　岩崎寧子

河風にちりにしはなも橋のもとに
しはし淀みてしらなみそたつ

隣落花　大谷籌子

中かきのとなりの庭のさくらはな
みなわかかたにちりて來に鳬

梨花　保科節子

梅さくらちりにし後もなつかしき
いろをみせたるやま梨のはな

雨中山吹　服部磯子

なひきふす八重山吹のはなの上に
露おくみれははるさめそふる

樵路躑躅　河村重子

そま人か歸へる薪にをりそへて

夕日まはゆきにつゝしのはな

心の花

牧牛

大畑弘國

すゑつひに重荷おふへき牛なれは
　はく〳〵み立よ心つくして
重荷おふうしにあらひて人みなの
　國に力をつくさゝらめや
さかれても身をはうしともおもはぬや
　國の力をまさむとすらん

松上霞

深みとり春の霞の衣笠を
　かつきて見えし唐崎のまつ

水邊鶴

玉島のあしまにあさるあしたつも
　雲ゐにのみとおもひ立らむ

蒲生重章翁をかなしみて

かたらひしきのふはゆめかうつゝかと
　定めかねてはまたなけくかな

花の殿

小西甚之助

きこり女か爪木にさせるもち躑躅
　家に待つ子のつとにやすらん
かさし見る乙女か袖に色添へて
　紫匂ふ藤のしたかけ
きこり女も皆かさしけり藤の花
　谷のかけ橋色めきわたる
春日うらゝ心ゆたけく庭の面に
　富みて貴ふとき花を見る哉
しろかねの眞砂の庭の玉つ瀬に
　黄金をちらす山吹の風

並み咲きて澤邊を圍むかきつはた
ことしの春も深き色哉

暮れ行く春の色々

すむ月に聞くよりあはれ朧夜の
花散る庭にふける笛の音

濃紫今めく傘に色こめて
藤見歸りや妹のひとむれ

老松の老を忘れし姿哉
若むらさきの藤のかゝりて

咲く花をまつに結びし藤葛
紐ときそむる頃とありけり

麓川峯に彌生の盡きぬるは
花の筏のゆくにてそ知る

隔竹聞水車聲

水車めくらす竹の生垣を
こえくる音は清くもあるかな



女訓綾廼雛形

揖取素彦

倍膳の事

一、客坐敷につきたらむ、まづ、手掛の代を出すべし。本式は、五種の盛り物、臺の作り方種々故實ある事あり。それを畧して、熨斗鮑を代に遣ふなり。三方に紙を敷き、長のし三枚ばかりを、元の方を紙にてつゝみ、水引をかけ、臺に据うるなり。臺は、三方にても木具にても、綴ぢ目を客へ向け、のしのもとを客の左にある樣にするなり。さて、持樣は、三方の狹間へ左の手をさし入れ、

左掌をもつて折敷の裏をうけて右の手を腰の處へそへて持べし。木具ならば、折敷と足との際を兩掌にて押ふる様にして持ち、左右の拇指を縁へ懸けて持べし。さて、客の前、少し隔て下に居り、二ひざ下がり、手をついてゐるべし。客そと一禮あるを見て進み寄り、兩掌をふせて、疊摺をいさゝか引きて、さて、手を狭間にさし入れ、右手を腰にそへて持ち、二ひざばかり下がり開きて起べし、近世の三方は、狭間せまくして、手をさし入れ難し、左手にて狭間の前の所をしかと握り、右手にて、折敷の前角をうけ持つべし。

一、茶烟草盆參らする様、先、茶を進め、次に、煙草盆を出し菓子を參らせ、茶を再び進ずるが本義なり。然るに、世上みな煙草盆を先へ出す様になりたり。誤りなれども、おしなべての事なれば、俗に從ふべし。煙草盆は火入れを客の左にし灰吹を右にし、兩手にて持參るべし。手のある品ならば、左手煙草盆を持ち、右手にて手を持べし。さて、客の前に二ひざほど進み、煙草盆を置き、少し、れし進めて二ひざ退き、開きて起つべし。茶は、高茶臺ならば、左手にて臺のなからを持ち、右の手にて臺の葉を持ち、客の前にて、二ひざばかり進み寄りて參らすべし。茶碗にふたあらば、まづ、下に置き、ふたを取り、右の手に持そへて參らすべし。客、茶碗を取上げたれば、蓋と臺は客の右の膝の前に置き、二ひざばかり下がり、開き立つべし。ふたは、臺の上にふせて置くべし。客喫し終へたらば、客の前に參り二ひざ進みて茶碗を臺へのせふたをして、二ひざばかり下がりひらきて起つべし。平茶臺の時は、左右の手にて、臺の葉をうけ持參るべし。客數人片側に列坐の時は、左上ならば、我左りへ開くべし。茶を出すに、

夏は少しぬるきかたにして多く注ぐべし。冬は、極めて熱くして七分目うちばに出すべし。再進の時には、少し濃くして、いかにも熱きを、うちはに参らすべし。

一、近頃は、盆に急須茶碗を組付け出すこと多し。これは、まことの略儀にて作法といふ程の事はなけれど、まづ、茶盆を以て参り、あるじの坐の下も手につき、夫より、茶碗を起して、托子にのせ、主客の碗に一返づゝつぎ、又、一返つぎ、托子のまゝ客へ進め、坐に歸りて、主の碗をとり、進る樣客におなじ。さて、勝手へ入り、湯瓶を持來り、急須へさして、あるじの膝元へ置き湯瓶を持下がるべし。また、客二三人以上あらば、茶碗茶だいを人數丈盆へ組付、前の如く持出し、まづ、瓶敷をとり、急須を盆の脇に假に置きて、茶碗を托子にのせ、盆上に排列し、急須をとりて一二三と順につぎ、また、三二一とつぎ、(是は、初碗と末の碗と、茶の濃淡を平均せしめんためなり。)さて、盆のまゝ上客の前に持參し、一碗づゝとりて進むべし。まづ、上坐へ進め、盆を次へうつし、一ひざくりて次客へ進め次第、如此して最末に至り、盆を持つてあるじの前へ參り、主にも進めて、盆を持ち元の坐に歸り、急須を盆へのせ勝手へ入りて、湯瓶を持來り、急須へつぎ、盆共、あるじの脇に置き、湯瓶を持ちて退くべし。

一、菓子は、緣高へ盛り、揚枝をそへ、八寸の木具へのせて出すべし。緣高のとぢ目を客のかたへ向け、兩手にて木具を持つこと、凡そ、我鼻の通りの高さにして、客の前少しへだてゝ下に居り、二ひざ計り進めて下に置き、木具のあしの下に手を兩掌をあふのけて、いさゝか推し進め、二ひざ下がりて開き起つべし。客列坐にても、この定に

てよし、上る時も、客の前にて二膝斗り進め、木具の足へそと兩手をそへて少し引き、さて、進む時の樣體におなじく、二ひざ下がり開き起つべし。煎茶盆の時は、盛り交菓子を、茶より前に正客の前に出だし置てよし。

あそび草（四）

作者不詳

みちをおこなふに、ひとのかたふけそしることあり。これになやみわつらはして、おこなふがよきなり。また、おこなはず、おこなはれず、ときにより、みにより、ことにときよること、たえてなきにはあらず。さりとて、これをはかるに、こゝろをいたましむることなかれ。たゞ、こゝろのそこを、きよむるにおこたることなければ、とぼしきことなきなり。

ものゝあはれ、よくしるものは、ひとなり。ひとにして、あはれしらざらんは、そのこゝろひとにあらず。あはれしるみやびは、きよきこゝろのはなり。きよからざれば、よくしるにあらず。あめつちのあひだ、おほきによしとする、また、をほきにあしとすることは、ときとなく、ところによらず、たゞ、あはれしると、しらざるとなり。きよきは、かならず、ものをやしなふ。やまとふみに、ひかりうるはしうして、くにのうちにてりをほりますといふ。いたれり。

こゝろいたりてきよければ、やさかにのまがたまやたのかゞみ、むらくものつるぎ、みくさのたからをはじめとして、ものゝよきこと、みな、おのづから、こゝにそなふ、きよきはかゞみなり。これかならず、ものにやはらぎ、おのれにつとむ。

たまのごとく、つるぎのごとし。たゞ、こゝろをきよむるしくはあらじ

ひとよりほかの、いけるものをみるに、おほくは、つのあり、きばあり、つめくちばしのするどなるありて、そのかたちの、またく、なだらかなるはすくなし。つや〳〵するどのかたちあらぬひとなり。そのこゝろ、あに、はじめよりして、さやけからんや。あはれしることふかゝるべし。そのあさきこと、いづこよりかはきたれる。おもはざるべけんや。おもへども、これをはぢず。あさきことをなげかず。そのはじめをもとめざらんは、ひとのこゝろとしてくちをし。

ひとのこゝろのゆくやすきをあづけてみちとす。みちあに、まことにかたからんや。しれるをこなへるともにやすし。さはまるところ、なほ、いひがたしとのみにはあらず。きくひとのうることなきは、もとむることのたらざればなり。

こゝろ、あながちに、しつけきことをもとめず。また、うごくことをいとはざりせば、うちおのづからやすらかにして、しつけきことをえてん。

こゝろをきよむるに、かならず、ひとつのみちなるにはあらず。あるは、うのやまひにより、または、そのえたるにしたかひて、きよむるがよきなり。なれらむさまも、ひとしきのみにはあらねど、こゝろのそこのまよかるこは、かれもこれもおなじ。

つねに、みちをあちはふれば、そのふかきことと、ひゞにまさり、たのしきこと、つぎ〳〵にくはふ。ときとしてあくことなし。みち、あに、かはりきたるならんや。おのれ、うつりもてゆくなり。

いさなぎのみこと、かんつせは、これ、はなはだ、はやくしたつせは、これはなはたぬるしと、のた

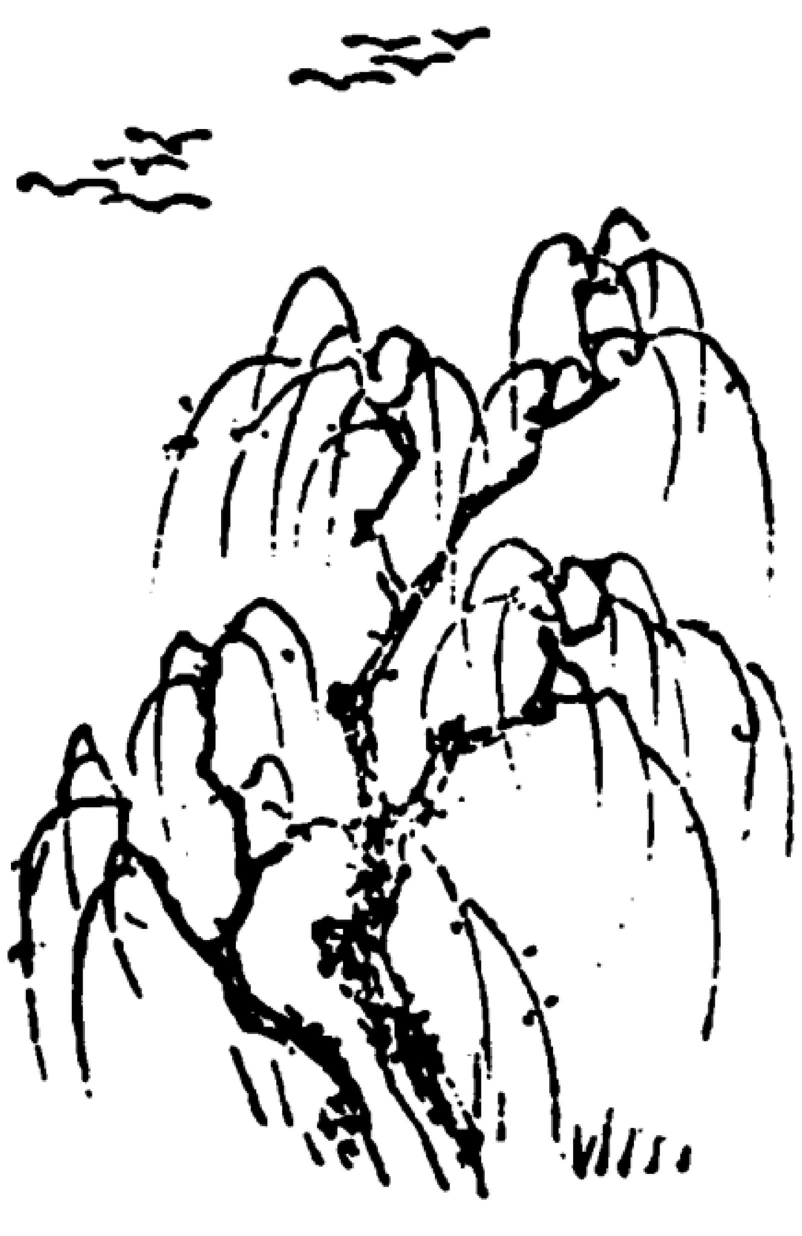
まうて、なかのせにすゝきたまふは、なかをとるにはあらず、そのすゝることのやすきにしたかひて、きよくいさきよくしたまふなり。かれかもとより、なかをとれるのみちにも、たかはさるありとはいへと、その、もとのこゝろは、ことなり。このゆへに、また、ことなるわさを、おこなふときに、そのはとよしとするところ、かれとこれとおなしからず。

すかたことば、たけたかゝらんとするに、こゝろをけがすことなかれ。こゝろけかれてはたかきにあらず。

みちは、もとめさるはつみなり。えざらんはどのひさしきを、つみとすへきにはあらず。おこたることなかれ。すみやかにせんことを、かならずとすることなかれ。

こゝろきよければ、しづけくして、あきらかなり。これをもとむるに、あきらかならんとすれば、しつかならず。しづけからんとするも、また、あけならさるかごとし。たゞちに、こゝろをきよむるにはしかじ。こゝろきよからば、ふたつながら、えてん。

こゝろかたち、きよく、しづけく、たゞしきは、つねなり。しつかならねば、きよらをうしなひ、たゞしからねば、けかれをゆるす。みくさは、もものよきことのもとにして、きよらは、みくさのなかのねたり。かたちは、けがれに、ふることなきにあらじ。



各國婦人の特色

三石直方

▲他の長は、資て我が短を補ふべし。他の短を以って、反省の料となすべし。

▲たゞ我が長をすてゝ、他の長短をあはせろとの惑をなすべからず。

第三章　佛蘭西婦人

（其の四）佛蘭西婦人の模範

（一）英雄の母

地中海上の一孤島より出でゝ、歐州の風雲を攪亂せし英雄拿破翁第一世を生みし女丈夫を、ルチ、ヤと云ふ。拿破翁は、豪奢一世を驚かしゝ程なるに、其の母なる人は、全く之に反し、節約克己、他方には、寧ろ、吝嗇家として嘲らるゝ計りなりき。然れども、一片稜々たる氣骨の犯すべからざるものなり。嘗て、巴理なる宮殿の園中を母子共に徜徉の折柄、ナポレオン帝は、如何に思ひけむ。其の手を母の前に差出し、之に接吻し給ひねと戯るゝが如く、而も、嚴なるが如くに申されければ、母は、怫然として之を斥け、おん身こそ、母が手に接吻し給ひね。母たるもの、何でう然ることをなし得きと。蓋し、拿破翁帝よりすれば、佛國人民は、悉く其の臣隷なり。臣隷たるものが、皇帝に對するの禮として、其の手足に接吻するを常とす。故に、帝は、此の義を以て戯れられしものゝ如し。

ルチ、ヤの偉とすべきは、之のみならず。嘗て、田舍にありて、極て質朴の生活をなしゝ時も、佛國皇帝の母后となりし曉も、其の心に於て、微塵の増長なく、其の行動、亦、依然として異ならず、殆んど、吝嗇に近き節約を守れるが如き、如何に、自持する所の堅固なるかを見るべし。

且つ、ルナ、ヤの性情として、強くして幸運のものに屈せず、弱くして薄命のものには、非常に、愛憐の涙を濺ぐ、例へば、其の衆兒の中にて、ルシアンは、他の兄弟に比して最も弱くして薄運なりき。左ればにや、太く之を鍾愛し、帝が、其の兄弟を各地に封ずるに及び、帝に乞ひ、ルシアンをして、最も富境の地方を得せしむ。既にして帝業地に塗れ、帝は孤囚となり、エルバ島に流竄さるゝや、ルナ、ヤは、大に之を悲み、紅涙は其の死に至る迄瞼邊に乾かざりしとかや。

(二)　畫家ロザ夫人

能く自家の天分を知り、奮勵休むなくんば、大小遲速こそあれ。何人か、成功せざる事なからむ。ロザ夫人は、佛國のボルドヲに產る。父は畫家なりしも、其の技優ならざりしにや。其の名顯はれず。貧困と戰はざるの日なかりき。左れば夫人、天成の畫家なりしも、貧困のため、正式の敎育を受くる能はず。常に、男裝して動物園に入り、或は、屠牛場に、或は馬市に、身を潜め心を潜めて、一々動物の骨格態度を研究し、遂に、一年美術展覽會に出品して賞牌を得、次で、馬を畫いて絕大の名譽を博し、夫より、動物畫家として、佛國第一の推稱を受けしが、夫人は、是を以て、毫も意に介せず、益々進んで其の技を研精し、拿破翁三世皇帝より、名譽勳章を受くるに至れり。

剛毅俠行は、夫人の天禀とも云ふべく、曾て、普佛戰爭の際には、屢々、普軍の加護を斥け、我家を擧げて佛民の棲所とし、年、既に八十に近くして、猶、男裝し、研畫旅行に努むと云ふ。

女子要書解題（遠の部追加）

三浦千畝

女萬葉稽古草子　一册

著者は、或奥方の右筆なるよし跋に見ゆ。跋文は林氏蘭女草稿とあり。享保十三年の刊行なり。此の書は、女子用文章の類にして、女の文作るたよりに編まれたるものなるが、體裁は、四季の例題一贈答毎に、貴人同輩、下輩の三段に別ちて三章づゝ擧げたり。

女日用大全

著者詳ならず。寛政八年の刊本なり。大要は、さげ髮をゆふはじめの事、かみを長くする藥の事、髮を黑くする藥事等を始め、髮、衣服、又は諸道具の事など女の心得なにくれと書きあつめたる雑書にして、女中道知邊など云ふものゝ類あり。

女五經

作者詳ならず。延寶九年の刊本なり。さてこの書は、仰々しく女五經など題したれど、その實「をかし物語」といふ一部の小説に、列女傳をぬき〳〵に挿みたるものにて、木に竹をつぎたるが如き、寧ろ、滑稽じみたる書なり、卷末に「われ此のさうしをよそよりもらひけみするに、ことのはおもしろく書きあつめながら、その文つゞきさだかならず。明石の前の御こと、つぶさにしれざるところをかきいだし、今女五經となづけ、世にひろむることしかなり。」となり。元來女子に關する書籍に、羊頭を懸げて狗肉を賣る類のもの尠からず。多くは、書賈どもの姦譎なるが、かゝることとして利益ありしを見ても、當時女子敎育の、極めて不完全なりしこ

とは知られつ。

女庭訓往來

作者詳かならざれども、極めて新しきものにはあらず。文章の用語体裁等より見るに、室町時代のものと覺ゆ。此の書は、女大學等に次ぎて、廣く行はれたりと見えて、大小數板あり。予が見たるは、女庭訓寶箱と題し、貝原先生輯と名を掲げたる書なり。(文化十四年板、天保十四年再刻、嘉永三年三刻)又女庭訓往來と、正しく書名を擧げたる、弘化年中の刊本もあり。

小野小町考　一卷

本居内遠の著なり。内遠は本居大平の養子にして紀州に住す。父祖の業を繼ぎて最も史學に長じ、歴史傳記の類にして考證をものせしもの甚だ多し。安政二年歿す。年六十四。

此の書、小野小町のことを考へたるものゝ中にて、最も詳細なるものなるべし。なほ小町のことを考へたるものには、岡本保孝の七小町考などもあり。

(和　之　部)

和國玉かつら(絵入)　五卷

著者詳ならず。寶永六年の刊行なり。衣通姫光明后以下、吾が國古來の名女、三十六人の事蹟を傳したるものにして、圖を入れよみ歌等をも載せたり。

古今和國新女鑑　五卷　一冊

此の書は「日本名女ばなし」と異名同書なり。さて『日本名女咄』は、亦『本朝貞女物語』と異名同書なること、而して名女物語とあるが、その原名なるべきこと、已に云へるが如し。貞女物語は、元祿八年の刊行にして、此の書は正徳四年の出版なり。かく同一のものが、書題を

變改して、數年の間に兩三度も發行さるゝを見れば、當時よく行はれしものなるべし。蓋し古今和國新女鑑といふ書名は、本書の序に『倭國のいにしへより、このころきゝつたへし名ある女性をとりあつめて』云々とあるにとりしならんが、例の書林どもの仕業と覺えて、書名いかにも拙し。

詠史百首（加藤千浪作）評論

海上胤平

忌部廣成

人の世にとほき神代のかたりこと
こをば君こそ書き傳へけめ

趣意は聞えたれど、いひたるまでにて、差略もなき歌なり。四句、こをぞ君こそなど、いと拙し。

久米仙人

をみなへしなまめくのみか花妻の
はぎにもおつるものとこそみれ

僧正遍照の歌を思ひかけたるなれど、つたなくて、いひかひなし。萩の花妻とこそいへ。花妻の萩とは、いかでか言ふべき。脛をいはむとて、かくもてつけたるにや。詞は心にまかせ、口にまかせて言はれぬものぞ。四句、語を成さず。此の歌は、久米仙人によめるなれば、詠史歌集といへるものに、入るべき歌ならず。

菅原贈太政大臣

雲井にはすみはてねども折えたる
月のかつらは今もにほへり

折えたる月のかつらとは、久かたの月のかつらもをるばかり家の風をもふかせてしがな。この歌によられて、大臣の學德、今の世にも匂ひた

りといふなるべし。其の意は知られたれど、折えたる月のかつらとは、空言なり。此の大臣を詠むひとならば、かばかりのことにては叶はじ。大方の學生と、ひとつに思ふべからず。

檜垣老女

水上のふかきこゝろはしら河に
　ながれてこそはくみしられけれ

水上はあさくも、末は深きなどこそいへ。水上の深きといへるは、詞に、あやなくて、まだしきなり。されば、水上のきよき心ともいふべきか。また、こゝろはのは文字、四句の、こそはのは文字、かしまし。二句の、しら河、結句のくみしられ、そもうるさし。

紫式部

むらさきの根なし草とも見えざりき
　花も實もあるふでのすさびは

浮草の根なしなどこそいふべけれ。紫の根なし草とは、いかにぞや。四句、褒賞の詞なれど、筆のすさびに、花も實もあるとはいひがたし。みだりならずや。

清少納言

卷あけしをすの外山の雪にこそ
　ふかき心のあらはれにけれ

簾まく、すたれかゝぐるなど、古人のいへるは優なり。まきあけしとあるは、いやしきことばなり。歌は、詞正しく高尚によむべきものぞ。四句深きこゝろのといへる、この句、ふかき心はといふべし。

鴻城雜錄（二）

白松園主人

○鰐石川の昔物語

山口町なる鰐石川は、螢の名所なり、大内氏中國に威を振ひし時、山口は殊の外なる繁盛にて、旗下の武士はいふも更なり、近國近在の、豪傑の士、皆膝を屈し頭を鳩めて、その下風に立たん事を願ふもの、陸續として馳せ加はり、物貨の輻湊、車馬の絡繹、ひねもすに絶ゆることなく、世は殺伐亂離の、もなかなるに係らず、農商皷腹して、泰平を謳ふもの、みち〳〵たれば、誰れいふとなく西の都と稱して、亂を避けて入りくる者、日にましければ、山間の大都會となりて、山の裾野の末も、軒の續かぬ處なく、三里を隔てし小郡まで、櫛比魚鱗の街とぞなりにける。かゝりければ、築山の花の晨、姫山の月の夕、國内無異のあまりに浮るゝ人なん、いとおほかりける。

夏の初め、山郭公おとづれて月にはうとき、二日三日の闇夜なりけり、築山の館にありて、宗家の嫡主弘茂ぬしを補佐する、大内盛見卿は、今年八歳になれる嫡子某丸を召されて、仰ずるやう、今宵は空いとよく晴れたれば、例の鰐石川の螢合戰こそ、いと興ふかきながめならめ、よひのうちより甘寢せんよりは、御身近臣と共に、見にものしたまはずや、とそゝのかせば、そはいとよろこばしく候とて、其の夜近臣二人三人に召し具せられて、鰐石川なる重岩のあたりより屋形舟に乘り、中流に棹し出でぬ。

こゝの葉末、かしこの小草の露にすがりて、螢火點々消ゆるが如くに、見えしは、しばしのひまにて、螢軍幾千萬といふ數を知らず、東より西より闇を縫うて此の川に集り來る、一陣二陣、中軍あり、後軍あり、遊軍あり、敵味方入り亂れて、閃々爛々、追はれて水に落つるあり、敗れて遠くにぐるあり、血戰一時あまりにて、互に物わかれし

て、しばらく息を繼ぎ、また整々と隊伍をとゝのへて、うちよせつゝ、いつ果つべしとも、見えざりけり。之れを見んとて、山口の人々、武士もあらぬも、夕方より此の川のべに集りて、あるは小舟に取り乘り、あるは橋の欄干にうち靠れ、賑はしきこといふべうもあらず。橋上橋下の人々、小笹もて捕ふるあり。團扇してうち落すあり。螢籠うち叩きて、われ捕りてよと、乳母の手にすがるもあり。されば盛見卿の公達も、われ捕れと仰するに、近臣等は心を得て、我も〳〵と舷にうち出でゝ、頻りに手を擧げ、扇をふりて、水にうち落しては、すくひて上ぐるもあり、興に入るまゝに笑ひ罵りて、何ごともうち忘れ居たりしが、ふと心づきて、屋形のうちを見るに、公達はなし。皆皆うちおどろきて、さきに、舳先におき奉りたるに見えたまはぬは、屋形に入り給ひぬとのみ、思ひ奉りしに、見えさせ給はぬは、あやまちて水にや入らせ給ひけん。思はず興に入るまゝに、なほざりにせし罪、のがるべからずとて、皆々うちさわぎて俄に人を走らせて、館にしらせまゐらせ、水の上下くまなくさがし奉れど、はや時すぎたれば流れやうせ給ひけむ。更におん屍の見え給はずなりぬ。

之より、右のおもだちたる近臣は、あやまちとは云ひながら、失ひ奉りし罪輕からず、御屍を求め得ずば、許しがたしとの事にて、その川筋を隈なく求めに求めけり。

「こゝに、小郡村字東津といふ處に、明壇寺山といふ處あり、椹野川滔々としてその麓を流れ、舟揖の便、釣魚の樂あり、東南は東津長橋と、山陽鐵道の鐵橋とを隔てゝ、百間の海、秋穂の浦を望み、春霞罩めたるなかより、丸尾の山ほの見えて、

煙波鏡に似たる海上を、白帆かけて入り來るあり煙吐きて馳せ去るあり、僅に眼を西に轉ずれば、沃野咀々小郡市街を隔て丶、山手山に對し、彩雲黃氈蛺蝶花に戯むる丶あたり、得も云はむ眺め、遠く塵寰を離れし心地して、濶然として目開けば、心はるる仙境あり。此の處に一宇の寺あり、明壇寺といふ。これ此の山の名のある所以にして、此の寺には彼の盛見卿の公達のおん墓あり。即ちかの川に沈み給ひし時、流れて此の麓の川にか丶られしにより、家臣その由申しあげて、やがて此の處に葬り奉り、寺をさへ建立して、かの罪つくりし近臣、かづらおろして、住持の僧となり、唱名念佛して、あと吊ひけりとなん、今もその寺の殘れりけり。

そも此の公達の、失せにしは、盛見卿がわが子の愛を忘れて、大義、親を滅したる、忠義の心より出でし事とぞ聞えける、その故は、宗家の嫡子幼少にて、盛見卿陣代として、よろづ取り行はる丶により、武士皆盛見卿の嫡子を尊崇して、宗家に離る丶心ありしかば、かくては祖先に對し、はた宗家のため、あしかりなんとて、ひそかに近臣に旨を含めて、螢狩に托して失ひけるなりとぞ聞えし。武夫の意地こそあはれなれ。

古今叢談

山岡螢雪

（十八）五月の異名

昨日までも今日迄も、花にうかる丶心地なりしを、せき留め難きは月日にて、いつしか、花は根に歸り、若葉のみ瑞々しく茂りて、我も人も待ちもうけたる、春の詩神も夢の如くに失せまして、玆に

は、又、童部たちの勇み嬉ぶ、端午の祭なす月と
はなりぬ。

抑、五月は夏三月の眞中なれば、古來より仲夏と
て、潛確類書には云へらく、

仲夏者日月會二于鶉首一而斗建レ午之辰。
晉樂志云午長也大也言心物皆長大也。

と、鶉首は、仍ち、星の名にして、此の月を鶉月
と云ふは、蓋し、茲より起りたるならん。
されば、正しく謂はんには、鶉首月と云ふべけれ
ども、何頃よりか、略して用ゐることゝはなり
ぬ。

之れ、恰も早苗月と云ふべきを、早月と略し稱ふ
るが如し。

世俗、皐月をさつきと讀むは非にして、かうげつ
と云ふてそ正しけれ。

爾雅疏釋曰五月爲レ皐。五月得レ戊曰二厲皐一。

と、月令廣義には、節を芒種と云ひ、孝經緯にも
同じく、

小滿後十五日斗指レ酉爲二芒種一五月節。言心有レ
芒之穀可二播種一也
芒種後十五日斗指レ午爲二夏至一言心萬物于レ此假
大而極至也。

と云へり。此の月、中を夏至と稱し、或書に曰く、
と、蕤賓と云ふは、もと律なれど、いつしか異名
とぞなりける。月令廣義に云へるやう、

蕤下賓敬也。言心陽氣上極陰氣始賓二敬之一也。
白虎通曰二陰始生萎蕤陽不レ賓以爲レ用如二賓在レ
外而不レ爲二內主一

と、律暦志には、蕤は繼なり、賓は導なり。言ふ
心は陽始て陰氣を導き、養物を繼しむるなり。午
に位して、五月に在りと、書經には平秩南訛てふ
語あり。是即ち、夏の時節の暑さに遇ひて、草木

など、今を盛りに生ひ茂り、物皆さかんに變化すべきと云ふ意ならん。さればにや、南訛とも、茂林とも云ふ。

纂要曰木曰㆓蔚林茂林㆒五月名也。

とあり。其の他、夏の盛りなれば、盛夏とは云ひ、又夏の半ばと云ふ意にや。夏半とも、夏五ともいへり。

秘藏には、狹雲月とありて、

池邊なるまこもまじりのあやめ刈
やどにかざしつさくも月とて

と、藏玉には、橘月とて、家隆卿の詠に、

たが代よりたちばな月の名を留て
忍ぶむかしの思ひそふらん

又、月不見月とも云ふにや、顯昭法師の詠に、

五月雨のはれまも見えぬ空よりや
つきみず月といひ初めけん

此の月は、殊に、雨多くして、所謂入梅の候なれば、雨飽月とも、梅月とも、五月雨月とも云ひ、又、田舍などにては、今も、なほ、惡魔を拂ひ幸を祈る古例ありとて、此の月五日の朝まだきより菖蒲に蓬など折りて、家々の軒に挿み、節句祝ふ故にや。蒲月とも云ふ。白川殿の御詠に、

山かづの軒のしのぶにめなれつゝ
あやめもわかぬ五月雨の頃

とあり。又、吹喜月、いついろ月、田草月なども、皆、此の月の異名にて、知家卿の歌に、

しづのをがしける稻葉の五月雨に
晴間を見てや田草ひくらん

と。あはれ、見渡す限り野に山に、緑濃かにして、軒の橘濃く青きに、花のいと白う咲き出で、袖に香るも床しく、池の頭に出づれば、今を盛りに咲き競ふ杜若の、白に紫に、水に映りて、雜

魚の二つ三つ躍も愛らしく、頃しも、山吹の黄金をちりばめたらん如く、蔀板の裾を隱すまで、枝も重げに咲き亂れて、美しく媚びたるに、淡紅き林檎の花のしはらしきが、いつしか生ひのびたる若竹の葉に、はらり〳〵と散り落つる音も、聞きあへず、汀に集ふ蛙の聲かしましさに、五月女の田歌の節もよどみて、何となく、坐ろにおかしく、空の景色も、少し曇りたる夕つ方、近き梢に一聲もらす杜鵑の初音をきくも、最、めでたき極みならずや。

（十九）齊彬公の訓言

公は、大隅守兼宰相從三位齊興の男にして、島津氏二十八世の主、夙に、大勢を達觀し、警備を嚴にして、英名大に擧る。今、城西に嚴然たる別格官幣社照國大明神は、實に公の靈を祭りたる處なり、其のこゝに至らしめたる、決して偶然に非ず、一日諸臣を會し誡めて曰く、

一、人心の一致一和は政治の要目なり。
一、民富めば國富むの言は、國主たる人の一日も忘るべからざる格言なり。
一、人君たる人は愛憎なきを要す。
一、凡そ、人は、一能一藝なきものなし。其の長所を採擇するは、人君の任なり。
一、既往の事を鑑みて、前途の事を計畫せよ。
一、勇斷なき人は事をなすこと能はず。
一、國政の成就は、衣食に窮する人なきにあり。

と。是、誠に、治道の要訣ありと雖ども、一家の主たる者、とりて、日常に應用したらんには、庶幾くは過少なからむかし。

（二十）鵺學問

香川太仲は、修庵と稱す。姫路の人、初め、儒を

伊藤維楨の門に學び、俊才の名ありき。後、志を決して、醫を後藤達に受け、其の奥義を極め、有益の著書あり。時に、大阪に碩儒あり。三宅石庵と云ふ。

太仲評して曰く、石庵は、實に、鵺學問の達人なり、見ずや、其の首は朱子にして、尾は陽明、聲は仁齋に似たりと。聞く者、皆其の奇智を稱たりとか。

（二十二）　帆足翁の攝生

帆足萬里は、豊後日出藩の人。少くして脇愚山の門に遊び、最も、詩文に巧みなりき。當時三浦梅園、廣瀬淡窓等と博學洽聞をもつて、一世を驚かしたる大儒なり。翁、嘗て、人に談りて曰く、予が家、世々短命にして、皆、五十歳を出でず。我常に之れを憾とし、特に、攝生に意を注ぎ、最も飲食を節し、以て天壽を全くせんと欲し、終生晝飯を廢して、朝夕二食とし、朝は、必ず、粥を啜りしとかや。

されば、七十五歳までも存命せりと。實に、長命は養生にありて、養生は、又、食物にあるなり。古諺に、命は食にありといへど、其の度を過せは却りて、食の命を害する事尠からず、何事によらず、其の中庸こそ願はしけれ。

一夕話（承前）

大宮兵馬

叔父君の占捕られ給ひぬる故由は、心ある人のみこそ、國事の爲にとは知れ。大方の人々には、其許の叔父殿は、キリシタンにてありけり。由井正雪にてありけりなど、いたく、嘲りさいなまれたる、其の口惜しさは、今、猶は胸にのこりけり。

幕府の探偵は、時日の立つまゝに、いとゞ嚴しくなりて、叔父君と心合へりし人々の、忍びて此處彼處に在り經たるは、次々に占捕られて、日毎に、江戸へ送られつと聞くにつけても、いとあさましうて、吾にもあらぬ心地なりき。

斯くて、せんすべもなきまゝに、猶、松井が家に在りけるうち、京より、二里ばかり隔てて、川島村といふに、叔父君と親しかりし山口薫次郎といふものゝありけるが、其處へゆきて、己が身の成りの果を歎きしに、山口も、不便にや思ひけん。やがて、己を打ち連れて、村雲御所に出入せる、武田相摸介といふ醫師の許へ尋ねゆき、御局方へ奉公させてよと頼みしかど、それは、衣裳なども備はらではかなひがたく、又、慥なる人の、身許引き受けせずではとありければ、其もまた事ならずして、今は、思案も盡き果てにたれば、如何はせん。暫し、若狭へ立ち歸りて、兎も角もと、心ならずも、親族に身を寄せてんと思ひ成りぬ。さては、山口も、其然るべしといひて、銀一分二朱ばかりを取り出でゝ、路の程の旅費にせよとて、借し與へつ。

京都を立ちしは、同じ年の十二月廿三日なりき。大津へかゝる路次は、程も遠く、人目の關も恐ろしければ、八瀬大原などいふあたり過ぎて、ほどはど、往き來絶えたる山路分け入りて、近江若狭のあはひなる、山中といふ所にさしかゝれるに、此處にて、番所ありて、堅く、女人の通行を禁めたり。(これは、昔、淀君の御妹に、常光院尼といふおはしけるが、此の山路より打ち踰えて、若狭の方へ落ちゆかれしによれりとぞ。)からうじて打ち案じて、番所のかたへある間道に忍び入りぬ。枯れ枝を冱えわたる風の外に、人おともせず。

心ぼそさ言はんかたなきに、五十丁ばかりの高き山をさへ踰えんとす。さなきだに、樵夫炭焼きどもの通ひ路にや。一尺許の道幅にて、胸衝くばかり嶮しくて、笹荊棘など生ひしげりたれば、そばそばしくて踰ゆべくもあらざるに、此の日は、特に、空打ち曇り、雪さへ降り來て、風も烈し。素より、知らぬ旅路の歩むべき方なく、行く先も見わきがたく、或は、雪中に倒れふし、或は、崖に墜ち轉びなどして、漸々、路におもむきけるに、彼方より、二人三人して來るものあり。近づき見るに、若狹の卒の者どもなりとぞ。女の身にて、斯かるさまなるをば、いと恠しみたる面もちにて誰人の息女にか。何の爲に旅するぞと問ひぬ。己は、小濱の城下なる藤井何某の娘なり。親の病ひと重りて、朝夕にも迫れる由の文おこせしまゝに、馴れぬ身の、旅の空に斯くてあるぞと、僞りて打ち過ぎぬ。

京を立ちしより、三日目の夕方に、小濱には着きたり。己が生れし矢部の家は、末の叔父君なる三五郎といふが、今の主人にてあらせられき。

さて、己は、人々に向ひて、有し儘を語り出でしに、伯母上（藤井リテといへる。）の愕き一方ならず。其ののたまへるやう、源次郎が召捕られぬと聞くよりは、汝は、如何さまにかなりたらんと、晝夜、心も安からざりしを。汝は、左程までも、膽太く雄々しくもありけるよな。これも、源次郎が生ふし立てしに由れるにかなど、口ごもりて、涙さしぐまれき。

己、矢部の家にては、絲つむぎ、物縫ひなどをば、日毎の業とはしたりしかど、召捕られ給ひし叔父君の事は、常に、思ひ續けられて、涙のひま無く、胸の安む時もなく、憐れ、昔の女子どもは親の身

代りに、罪を受け身を果たしゝもありと聞くを。いかで、己は、公に請ひ出て、叔父君に代りて死なばやと思へども、人々に止められて、其も、心のまゝならず。もしも、叔父君の罪輕くして遠島にも遣られ給はんには、何處の浦の果、山の奥へも添ひ往きて、御用をも承らんとて、心知れる人にし逢へば、たゞ、御ありさまを尋ぬるをば、せめて、己が力にはしけり。

竹

正胤翁

雪をしのぎて咲く梅も
霜に久しきしらぎくも
いかでおよばむ吳竹の
千代色かへぬ眞青には

訪問



福田會を訪ふ

田島利三郎

(二) 現在の院兒

現在院兒は、

	男	女
院內育兒	一八	二五
院外育兒	一三	八
留養者	一〇	三
嗣定者	三	一

の九十一人なり。院內育兒とは、乳を離れたる、即ち、滿三年以上のものにして、常に、院內にありて養育せらるゝものをいふ。院外育兒とは、乳

を要する幼兒、即ち、滿三年以下のものにして、院外媬母(里親)に托したるものあり。留養者とは、養子、或は、徒弟として他に養はれむとするものの、其の家に在りて、品性の如何を試みらるゝ間に屬するものをいふ。嗣定者とは、いよ〳〵、養子、徒弟として養はるゝことに定りたれど、いまだ、戸籍の手續を了せざるものなり。

（三）育兒の情況

是等の院兒が、慈善家のなさけの露によりて、いかに、幸福に生長しつゝあるかを語るに先ちて、まづ、同會に於ける、院內育兒取扱心得を紹介すべし。

第一條　育兒室を區分すること左の如し。

第一室　四房、第一號より、第四號まで。滿六年以上の、男女を區別しおく。

第二室　四房　第五號より、第八號まで。滿三年以上の男女。

第二條　媬母は、銘々受持の院兒に隨ひて、各室に分配す。

第三條　院兒中、病患者、其の他、事故あるときは受持の媬母より、直に、常詰司事に告げて、その指揮を受くべし。

第四條　門外遊歩の時には、必ず、媬母附添へて、院兒の擧動に注意すべし。又、一定の遊歩時間外には、獨歩外出を許すべからず。

第五條　第一號室日課左の如し。

一　毎朝午前自四月至九月は六時 自十月至三月は七時寢床を出で、衣服を更め、洗面の後、一統、佛壇前に整列し、禮拜して後「露の命」の讃歌を三唱せしめ了りて三十分を經て、飯臺に就き、一時の後、學堂に登る。

二　午飯後一時間遊歩し、更に、學科に就かし

む。但、七月より九月まで三ヶ月は、午前十一時限とす。

三　學課終れば、夏日の炎暑と、冬日の嚴寒とを避け、一定の時間を計りて、門外の遊歩を許すべし。

四　晩飯は、四月より九月までは、午後五時より六時まで、十月より、三月までは、四時より五時に終る。

五　就寢の時間は、晩飯の後一時間、隨意、學課の温習、裁縫を爲して、床に就かしむ。

第六條　第二號室の日課左の如し

起床、三食、就寢とも、畧、第一號室に同じ。未就學なるを以て、終日、隨意に遊戯せしめ、門外の遊歩は、午前の內、一定時間を計りて之を許す。

第七條　入浴の事

入浴は、晩飯の都合に寄り、其の前後、凡、二三十分時、隔て、第一號室より、順次、入浴せしむ。

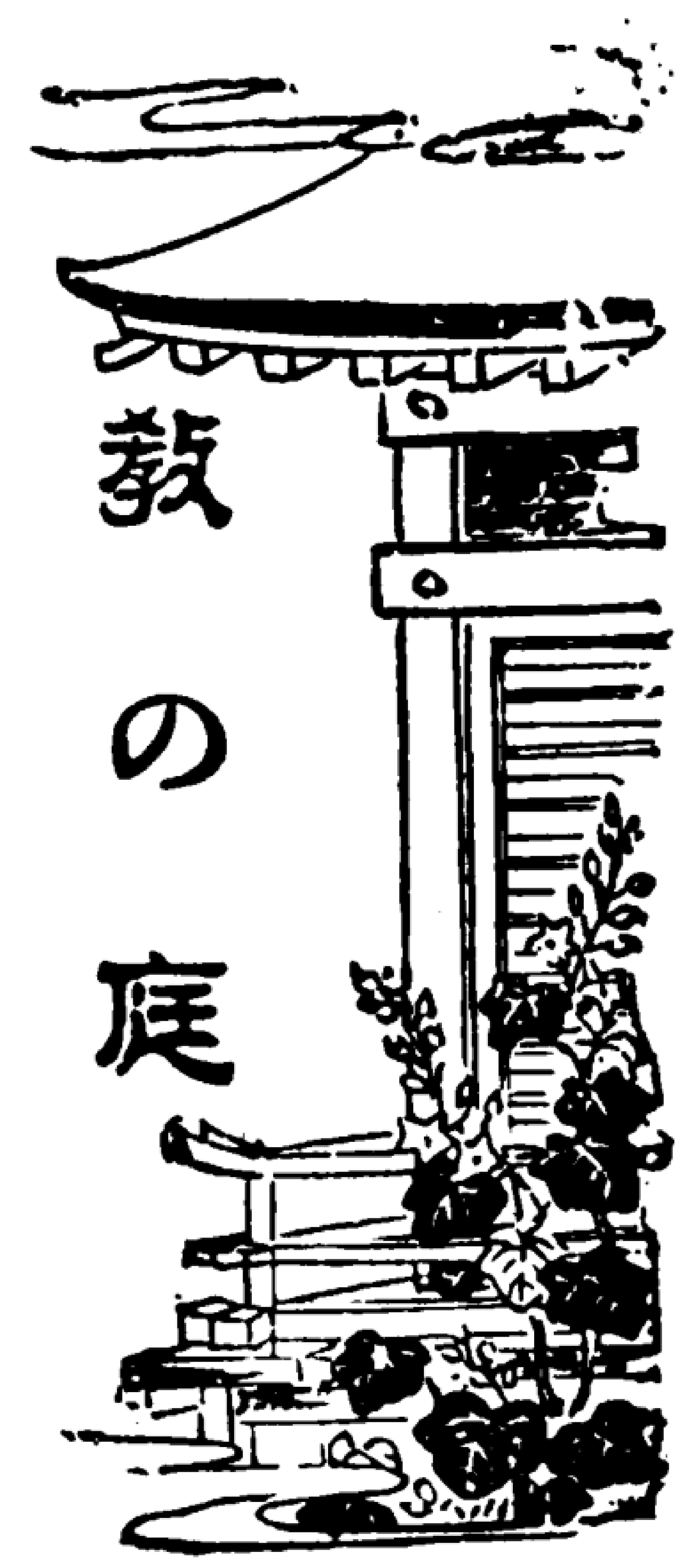
第八條　兒童就學中は總て、敎師の監督に付す。

さて、隱外育兒については、各担任の院外姆母、即ち、里親をして適意に養育せしめ、時々、巡視員を派して、各家につきて、養育の狀況、乳兒(院外育兒の、健康を視察せしむるなり。

まどゐ

正胤翁

君のかはらぬ皇國に
生れ出でたる益荒雄の
世にある限りつくさんさ
語る圓居ぞたのもしき



五月五日兼題

苗代

天　神田區駿河臺南甲賀町八番地　金原玉城子

ゆたねまくなはしろをたの水きよみ
としのさかえのかけそみえける

地　日向國都城町　本　とめ子

苗しろにみつせきいれてしつの男は
ゆたかにみのる秋やまつらむ

人　肥後國菊地郡城北村　德永廣子

はるさめのめくみあまねき小山田に
やかてしけらむつゆのたまなへ

秀逸　肥後　佐々小琴子

小山田のなはしろみづのかゞみには
みよゆたかなるかげぞうつれる

○　肥後　佐々有鄰子

年ごとにみづほのくにの名もしるく
なはしろをたのかすそまされる

○　三河　岡山良子

小山田のなはしろみつもかをるまて
さくらなかるゝはるのくれかな

○　周防　田村多豆子

八束穂のあきをたのみにしつのをか
ゆたねまくらむをたのなはしろ

○　肥前　日高かす子

引しめにたのみをかけてとよとしの
あきをそいのるをたのなはしろ

○　東京　小田みち子

みしめなは苗しろ小田にひきはへて
みなくちまつるみよそゆたけき

○ゆたねまくあはしろ水のゆたけさを　　三河　服部正子
　かはづもはぎてうたひかはある

○うあゐさへうちつれたちて春の日は　　林　琅子
　あはしろをたにしつそいそはく

（以下原稿到着順）

賤の男かをりすこさしさはろさめの　　田代艶子
　ふるのやまたにゆたれまくみゆ

けふみれはきのふよりけに苗しろの　　田代綾子
　みさりのいろそいやまさりける

春ふかみさくらも散りてせきいれし　　横非幸子
　みつもかをれるたのなはしろ

しつかにも月のやされるなはしろに　　松本萬子
　こゑさわかしくかはつなくなり

遠こちのなかれをせきてしつのたか　　吉田靜子
　はなちろをたにたゆれまくなり

治れるみ代をほきつゝしつの男か　　吹田たけ子
　たう〳〵たひてゆたれまくらむ

千まちたのなはしろ水にしつの男か　　小杉みや子
　さかゆくさしのたれやまくらむ

小山田のなはしろみつのそこすみて　　清水田鶴子
　つゝみのさくらかけうつるなり

しつの男か苗しろ小田にみしめはへ　　松尾くに子
　みつくちいはふかみまつりして

しつのたか五月をいそくなはしろに　　松尾やそ子
　はろもいさなくかはつなくなり

みやこ人きても見よかししめはへて　　村瀬はな子
　なはしろをたにゆたれまくひは

あまりある君のめくみもなはしろの　　源　たけ子
　あせこすみつにしられけるかな

きのふ今日小川のみつをせきいれて　　南里さた子
　なはしろつくるをやまたのさと

小山田のなはしろみつにゆたかなる　　永非さい子
　あきのみのりもかけてみねけり

神よりたねみたれのなはしろさ　　河方喜代子
　ふるはるさめにいろぞまされる

はるさめのめくみあまれき苗しろに　　千石文子
　ゆたけきあきそまつはみねける

夕かはつこゑしきるなり千まち田に　　德永萬森子
　なはしろみつやせきかけつらん

いさまなき賤か手わさのあらはれて　　戸塚銕子
　あをみわたれるたのなはしろ

苗しろにみなくちまつるみしめなは　　序山あや子
　かけてそあきをたのむなるらん

ちりつもる花のやま田をすきかへし　　吾妻ちか子
　なはしろいそくころにもあるかな

しめなはの見ねすなるまてわか苗の　　内田さく子
　いやたけたらくしけりぬるかな

水くちに今日みしめなはひきはへて　　山村友子
　あきのみのりをたのむむらひと

賤の男のそのいたつきはなはしろの　　田村米子

ふかきみさりのいろに見ねけり

賤の男のこゝろもやすしなはしろに　田村道子
みつあらそひのうさもなくして

時きぬとなはしろ小田におりたちて　梯竹子
たれまくしつのいさましきかな

ゆたれまく時きにけらしゆくみつを　野中朝子
なはしろ小田にせきわけにけり

大きみの御代はゆたけしなはしろの　戸賀崎治子
みつもあふれてあせこゆるみゆ

賤の男かみつせき入るゝなはしろに　伊藤田ふく子
つゆおくあさのみのりをそまつ

しつの夫か秋のみのりをいのりつゝ　小村琛子
しめやひくらむをたのなはしろ

花ちりてこゝろそうつるいちはやく　瀬戸ゑい子
あをみわたれるをたのなはしろ

ゆたれまく時來にけりといそくらん　松田春枝子
なはしろをたにみつをせきつゝ

來む秋のさかねも見ねてみつくさ　北島松子
あをみわたれるをたのなはしろ

はるさめに苗しろ小田もみつまして　北島功子
あきのさかねのかけもみねけり

荒小田にみつせき入れてしつの男は　北島操子
たれまくころとなりにけるかな

ふる雨をたのむやま田のなはしろに　前川すゑ子
しつかこゝろやまつせかるらん

しつのをはなはしろをたに水いれて　近藤頼子
いさましけなるはるのくれかな

しつかすむ家こそなけれはるたけて　山崎たま子
なはしろあをむ小やまたのさと

小蝶とひすみれはなさくかけなから　東郷常子
はるをたゝへしなはしろのみつ

せきいれし水もゆたかにたれまきて　太田みつ子
御よをたのみのをたのなはしろ

君か代はあらそふしつもなかりけり　山田稻子
めくみあまれきなはしろのみつ

さく花をかへりみもせてしつの男か　山田米子
なはしろをたにたれおろすなり

みのり出む秋の千まち田五百しろ田　村上操子
このなはしろをうふやにはして

いくしたてゆたれまく日は小山田の　上原信子
しつかこゝろもかみならふらむ

かはづ鳴く野川のみつをせきいれて　松尾せい子
なはしろをたにゆたれまくなり

小山田にゆたれまきつゝしつの女か　岡里てい子
ゆたけきみよをいはひぬるかな

きのふけふ降るはるさめに水まして　椎野寛子
なはしろをたのあせをこねつゝ

春さめのはれまにしつやいそくらん　椎野鋭子
なはしろをたをうちかへしつゝ

しめそへて八束たり穂のたれおろし　穂積稔子
あきをたのみのをたのなはしろ

うへしこそ齋種まきけれみつきよき　三宅中枝子
をたのなはしろあをみはたれり

たれまきしなはしろ小田に弓さ矢の　河合継子

まもりをおきてかへすますらを
ゆたれまくなはしろ小田に曳しめの　服部蔦子
むけさへみゆるみつのゆたけさ
さくらちるなは代小田をけふみれは　鍋田龍子
はなをませてもまけるなりけり
なはしろは靑みわたれりこむあきを　森田とも子
かけてひくらむみつもゆたかに
こん秋のたのみをかけてしつの男か　太田ため子
なはしろをたにゆたれまくなり
あせつたひさひしさなりも苗しろの　佐野きやう子
みつこすころはとほくなりけり
苗しろにみつせきいれて御しめなは　竹村竹里子
かけていのらんあきのみのりを

千町田のなはしろみつはきみか代の　なにがし
めくみのつゆのあまりなりけり

評、此の歌は上總の國なにがしより詠みこされしものにて、いと目出度、天にも撰ぶべけれど、嘗て、同題にて、正根ぬしが詠み置かれたる、（貯こゆる苗代水は君が代の惠の露のあまるなりけり）と、新撰歌典中の作例に出でたるものにて、似たる節、少からず。尤も暗合ならめど、こゝにはさらず。

ゆふされはかどたの早苗うゑはてゝ　なにがし
みとりすゝしきかせやまつらん
ふりつゝくあめにさなへや老ぬらん　なにがし
はれまにいそくたこのもろこゑ

評、此の二首は、共に、苗代の題には叶はず。

病氣全快を祝する文（其の二）

下谷區御徒町三丁目三十三　岡田柳子

先つ日、伯母上より、御許樣、御病氣のよし承り、候うてより、いと、胸安からで、日々そなたの空のみ打眺めて、いかに〳〵と、心を痛めをり候ひしに、今日しも、着し侍りし御全快の御文、とびたつばかりに嬉しうて、なん。昨日までも。今こそ、物學びに、殘りある、御身にてありながら、もしも、此上御病ひの重りゆきたらんには、いかゞはせむ。海山にも、かへがたき、み惠うけし、母君の御耳にも、いらば、いかに、驚かせ、玉ふらんと。ひとり、思ひ煩ひ、候ひしかば、ちりゆく　庭の櫻を、見るにも、いとゞ、哀れを、もよほしたりしが、今日は、中々に、梢の花の、池のもに、ちり浮ぶ樣の、いとをかしう覺えられ候ふも、已が心がらにや侍らむ。さはれ、此頃は、時候も不順に候へば、申す迄も、候はねど、尙々、御身御大切に、養生を旨となさるべく、學の道もさる事ながら、夜深うまでは、つとめ、玉はざらん樣、くれ〴〵も申し上候。先は、あまりの嬉しさにとりあへず、御祝ひまで、かくなん。かしこ。

人

松山末廣町　松田春枝子

野山のけしきさへも、いとうら〻かになりたれば、今日は、あすはと、ひたすらに、御身のいたつきのおこたらん事をのみ、心にかけつゝまち侍りし折から、全快にて、久しかりし床をも今は起しとの御玉づさ、いとも〳〵、うれしうなん。さるにつけても、常々、みこゝろをのみいため給ひし母上の御看護のほども、さこそとおもはれ、目出度さ、何にかはたとへん。ことに、けふのみ心やいかばかりならんとおしはからるゝ、妾の身のうれしさよろこばしさ、せまき胸にみちぬれば、何事も、萬は、後のたよりにとさし置きて、取あへず、御祝ひのしるしまで、かくはことすくなにきこえあげ侍る。あなかしこ。

人

大阪東區道修町　高安やす子

御とこのうちにて、したゝめ給ひし、この前の御消息にひきかへ、いつものうつくしきにかへりし、御文、只今つきて、なつかしく、くりかへし拜見いたし候。一昨日御とこあげもすみて、も早、明日より、學校へも、御いで遊ばさるゝとや、誠にうれしく存じ候。はじめ母様御上京なされし時の御手紙にては、いかならむと危ぶまるゝ程にて、日々そなたにのみ心のまゐりて、安き時もなく候ひし今なればこそ申に候。東京の姉様御病氣ときゝて、季なる妹の人一倍うれひ、毎朝人しれず、佛だんの前に小さき手をあはせけるを、或時ちらとみて、うれしさに涙こぼれし時も、こそ候ひしが、一時はくすしも、頸かたぶけられし程の御病氣、かくも速にいえしは、全く母様はじめ皆様の、御介抱によるなれば、かならずあだにな思ひ給ひそ。いつも申通り、此村よりは、御前様一人、はる〳〵都にのぼりて、物學ばるゝなれば、少しのおちどありても、そねむ人の、あしざまに云はんとするがならひなれば、御前様の學問專一とつとめ給ふは、道理ながらもとより丈夫の方にてはなき、御身に、あまりの御勉强はなさるまじく候。又今度のやうの事ありては、母様はじめ皆様にも、御心配かけて、却て、勉强があだとなり申べく、何事をなすにも、身と心とならびたゝずば、能はぬ事よく〳〵こゝを心にとめて、過度の御勉强し給ふな。さは申ながら、病はいつ起るやもしれぬもの、御さはりある時は、直に申こし給へ。遠くはなれ居る母様へ、御心配かけじとて、かくしおき給ふ御

心はうれしけれど、何事も、はじめのうちにふせがずは、大事に至りてくゆるとも、せんなきものに候へば、かゝることをくどく申あぐるも、皆御前樣の御身よかれかしと思ふあまりに候。御本復ときゝ、かゝる嬉しき事は候はず。雪と咲き匂ふ野山の花も、やさしく歌ふ小鳥のさえつりも、けふこそはじめて長閑に樂しくきゝ申候。人は、皆、花よ蝶よと、うかれたつ此頃引こもりおはさず、心のどかに充分の御保養なさるゝやう、願上候。日頃、親しき優子樣、今度の病氣につきて親兄弟も及ばぬ、懇なる御看護下され候よし、いつもながら、誠にやさしくなつかしき御方、妾の身にとりてもうれしく候。反物二反小包にて送り候間、田舍の手織にて、見ぐるしく候へども、一反は御前樣に、今一つは、優子樣に御ねまきになど遊ばさるゝやう、御わけ下され度候かしこ

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

文して申入候。松子の其元には、學校の寄宿所のかりの屋舍にて、病にうちふし居られしよし郵便にて申越されしにより、見舞のため、汽車にてまゐらんとぞんじ居候處、かれこれ時をうつしつるうちに、早くも、全快いたされ、床揚げなされ候よし。何より目出度事に候。菊池川の兒鮎のくわんづめ一箇、粗末ながら、御祝のしるしまでにさしおくり申候。不遠うちに、御よろこびに參り可申候。なほ、御目にかゝり、萬々可申入候かしこ。

河方喜代子

明け行く世の嬉しさよ。其のかみは、不治の病と見なされて、くすしも手をば下さゞりけるに、今日は、如何全治退院さぶらへる、吉報、山龍堂の病院より來りぬ。あなうれし。夢かうつゝか、ひさゝせあまりなやみたまひし御身が、月出度き今日にあはんは。月のかづらも手折りたらん心地せられて、拙なき筆には、思ふ心の萬分の一だも得つくすべくもあらじ。先はさそくまうのぼりて問ねまほしく、先は、嬉さのあまり、氣も心も亂れがきして、かくなん。あなかしこや。

南里さだ子

執る筆も、おごろばかりの嬉しさよ。先は、御許樣にも、永々御病氣の處、明日なん御床上の由。おだまきのくり返し御喜申上候。一時は、如何になりゆかせ給ふかさ、食事なども通す御案じ申上候を、かくめで度御祝をなさるゝ樣になられ、一家の喜、此上やあるべくさここそ思はれ申候。こは誠に恥かしきものながら、心ばかりの御祝に御座候まゝ、御納め被下度、何れ明早朝に御手傳方々御伺可申上、御めもじの所、萬々、御禱申上、まづは、使もていくなむ。示しょ〻。

高山眞子

さいつ頃よりのいたつき、もはや、全くいゆしさの趣、父上母樣の御よろこび、さこそさ思ひやられ、誠にうれしうなん侍る。げに、病程、うきものはあらじかし。そなたも嘸や、つれなく思ひたらむせめて。此身、御身の傍にありたらんには、少しくうさ

をはらすよすがにもと、思ひしこともありたれど、慈愛ふかきふた親も、をはすことなれば、さまでの心づかひには及ばぬことよと、思ひ返し、ひたすら全快をのみ祈り居りしに、けふしも、いとよろこばしきたよりに接し、殊の外安堵いたし候。一時は、なか〱重症の由きゝたりしが、かくこともなうこゝろよくなりしは、皆、父母のあつき御めぐみなれば、ゆめおろそかにな、思し給ひそ。尙、此上は、今迄に倍して、孝養おこたりなかるべく、くれぐれもねんじまゐらするにこそ。

いづれ、ちかきわたりに、歸鄉いたし候へば、其の折くさ〲御祝ひ申べく候。まづは、とりあへずかくなん。　かしこ。

山崎たま子

うれしさに、包みかねたる、胸の内、一筆ことほぎ、侍るになん。扨て。御許には、氣候の、あまり不順の爲めとて、例の持病をひきおこされ、永らく困じ居給ひしが。またく、常人に露の變りも、おはさぬばかり、全快遊ばされしよし。御身のさち、御兩親の、御よろこび何にたとえん。又、此姉のうれしさも、拙き筆にはつくしがたく、よろしく、推量し給ひてよ。ここに一重に、くすしの御力とは、申すものゝ、御身の、御心づくしも、山ならでは、かのふまじく覺えまことに。心もとなく、ぞんぜられし、孝養も、いよゝ今日より、心のきはみ盡さるべく、又、前よりのぞみ居られし、美術科も、心のこまに、いそしまるべく。野邊のけはひも、一しほゆかしう見給ふ事も、成し得べくうれしきかぎに、幾重つきそふうれしさ、なるらん。繰りかへし、祝ひ唱ふも、尙淺き、心地してなん。きこえあげたき事どもは、海山おはせど、萬は、はぶき、たゞよろこびばかり申し出で候。申すまでもおはせねど、此上ながら、御身大切に遊ばさるべく、筆のついでにかくは、姉の願まであら〱　かしこ。

赤倉かれ子

そなた樣、なが〱あしく候を、全快一日も、はやかれかし、とのみ、祈り候ひし甲斐ありて、全快の由、申されしを、うれしさはせまき胸にみち、雲まの月にほのめきて、卯の花にまがへる、山吹の花にかくるゝ、山ほとゝぎすの初音にも、一際勝りて、嬉しうなん。さても此品は、粗末なる品に候へども、御祝のしるし迄に、さし上候。笑留下され候はゞ本意に候。なほ、病後せつかく、保養祈上候。　かしこ。

有元萬子

すゞなの花にたはむるゝ小蝶も、雲井はるかにあがる雲雀も、心ゆげに見ゆる折しも、御前樣には、長々、御いたづきにて臥床に入らせられ、誰樣より、日々御容體を傳へ聞きし時のかなしさよ。

御兩親樣にも、御前樣の、日頃壯健にて、日々學びのわざをはげみ居るを、毎日〱うはさ、せられ、よろこび給ひしに、去年の冬の末つかたより、御前樣御いたづきと、きかせ給ひてよりは、今日はいかにあすは如何にと日々、善心をなやませ給ひ、朝夕に天地にまします、神樣に手をあはせ祈り給ひ、御前樣御存じの、常々樂しみてのませ給ふみ酒をも、ろく〱に進ませたまはず、誠に、老の御身の御氣よはさに、妾の心苦しさ何にたとへん。色々となぐさめ、御許よりのたよりをのみまちはべりしに、折しも、郵便の一聲、耳にきこえまもなく、下女一封の手紙たづさへきたり、候故、妾は、又誰樣より御身さまの容體を御知らせ給ふなるべし。されは、御兩親樣の御許にて開かば如何と思ひ侍れば、何かにかこつけ、かたすみの方にて、取る手おそしと封おしきり讀み下せは、あなうれしや。珍しき御前樣の御筆跡にて、誠に力づきたゞちに、御兩親樣の御許にもち行き、殘る方なく繰返し讀めば、

此度は、御全快との事。さきの病中の御かなしさにひきかへ、今のは御よろこび、誠に、妾に至る迄、うれしき熱涙にむせび侍りぬ。今日は如何なる、吉日なるか。實にめでたき事にこそと、家内一同打つどひ、御身の萬歳を祝し、今日迄やめさせ給ひしみさゝをものませ給ひ、よろこばせ給ふてなん。猶病後の御身なれば、食事などに、つゝしめなされ、御保養專一にと祈り侍るになん。なほ／＼きこえ上たきは、數多けれど、みな、御目のあたり申のぶべくと申殘してなん。あなかしこ。

竹澤たけ子

一日も早く、御全快の程をと祈り居り候へし甲斐ありて、此兩三日は、全く、快くならせられ候由、いと／＼嬉しく、久しく、聞かざる、笑の聲さへ、家のうちにみち候を、何れも樣の御喜びは、いかばかりかと、此上なく、御祝ひ申上候。御許樣にも、久々にて、妹君と、手をつられたまひて、學びの道も、御勵み遊され、朝夕は御兩親樣へ、御孝養も、御づくし遊され候御事と、いづれも／＼限りなく悦び上候。私も、直に、參上致し、御ほぎ事申上度候へども、とりあへず、御祝の印として、妹子樣の御行末をこめ候へど、一枝差上奉り候。まづは右御祝ひまで。あら／＼かしこ。

はる雨のふりにし日よりわかくさの
　もゆるおもひもいやまさりつゝ　小野三千代

三吉野の山邊にさける櫻花
　ゆきとのみこそ誤たれけれ　常川松子

山吹のいろももみぢのくれなゐも
　目をおどろかすなでしこのはな　佐々小琴子

をしへぐさ栽ならべたるには中を
　うれしくも今日わけみつるかな　佐々有鄰子



樂園

孤兒の吟

その一

與太生

ちゝのみの
父のかひなを
まくらにて
睡る兒どもは
よきかみの
守り給ふらむ
はゝそばの
母の乳ぶさを



手まさぐり　わらふ兒どもは
なにばかり　善きことしけむ
たまさかに　ひとの兒どもと
われもなほ　生れしものを
いかなれば　親のなき兒と
世の人の　おほきが中に
われひとり　しひたげらるゝ
あはれそも　如何なる罪の報なるらむ

その二



父まさば　かくもあらじを
母在さば　すべもあらむを
もの食はで　七日にありぬ
水のまで　五日にありぬ

この坐ます　御墓の上は
しのぶ草　おひこそしげれ
露霜の　おきてそまされ
なにごとの　樂しかればか
我をおきて　かくれたまへる
いとほしと　子はおぼさずや
母だにも　父のみだにも
いざやいざ　歸り來まさね　最愛子のため

その三



某も來よ　彼も來れと
よびかはし　いざなひあひて
寺の前　神社のうしろに
子守歌　うたひかはして

いしなごを　とりあそぶなる
その兒等を　いとなつかしみ
はせ寄れば　避りて嗤ひぬ
石とれば　其もうばゝれつ
すべをなみ　わぶる我が身に
石なげて　竹さへなげて
たのしげに　何地ゆくらむ
何時も何時も　我をば除きて　兒等はあそぶなり

その四

その兒等を　いつくしむなる
ひとの子の　親とふひとに
すがりつゝ　たのまむとすれば
おやなし子　盗賊やすらむ



みなし子は　よからぬものと
おもひきや　思はぬことも
はゞからず　言ひおほせつる
彼の兒等を　かくともいはゞ
いかばかり　口惜しからむを
わすれても　思ひもやらず
たゞわれを　おやなし子といふ
ひとの親の　こゝろのうちの　たのまれぬかな

その五

此處に寢な
彼處にな居そ
人みなの
ためならずとて
つるぎたち
はけるますらを
朝な夕な
巡りとぶらひ



かたときも　安眠もえせず
　こゝろなき　荒ゐのしゝも
萩のとに　ふしどはおけり
　人のために　はかるとかいふ
つかさ人も　われをたすけず
　世の親も　われをかへりみず
あどけなき　兒供さゝだに
　ひたすらに　われをへだてつ
世の中は　如何なる人のすみかなるらむ
さてもまた　如何に果行く我が身なるらむ

幼き人々のために

香谷女史

若殿樣の旅行（上）

むかし昔、其の昔、爺と婆が在つた時分、今の淡路島のあたりに、海の殿樣といはれて、土地も船も、澤山に持つて居た方が御座りました。太郎、次郎三郎といふ三人の若殿樣が御座りましたが、皆、御怜悧で、勇壯い、而かも、それ〳〵、年頃な立派の壯者で御座ります。

或時、兄弟三人御相談の上、各々船に乘つて、何地へか旅行をして、一は、身體を強壯にし、一は、武術を磨き、若し、仕合よくば、寶物でも持つて皈らうではあるまいかと、其の由を、御父上に願出ました。

早速御許で、直、大い立派な船を拵へさせまして、其に、兵隊やら戰器やら、總べて不自由のない樣にして各々に與へくれました。

いよ〳〵、明日明後日、順風次第に出發といふので、御別の盃か御座りました時に、殿樣は、

如何ぢや、太郎。汝は先何地へ往て如何いふこ

とを爲うといふのぢや。

太　ハイ。私は東の方へまゐりまして、何か寶を澤山もつて來たいと存じます。

よし〳〵。どうか無事で往て來なさい。ソコで、次郎は如何ぢやの。

次　私は、西の方へまゐりまして、御兄樣と同じく、澤山の寶を持つて皈りたいと存じます。

殿　左樣か。それも結構ぢや。無事に皈つて來るのを待つて居ます。三郎、汝は如何いふ考ぢやの。

御父上、私は、何方でもかまひませぬ。往かれる地までは參りまして、何か、御父上の御爲、土地の利益になる樣なことを爲て歸りたいと存じます。

殿　ウム……其は面白い。やれるだけ行つて來なさい。

誰も無事で、

といふので、皆々、志す方へ向つて出帆いたしました。

東の方へ進むだ太郎樣は、一番さきに、銀の島を捜し當てました、岸邊の巖石も銀なり、濱邊の砂も銀なり、土地草木まで悉く銀で御座いましたから、何でもかまはず、船一ぱいに積込むで歸つてまゐりました。

西の方へ往つた次郎樣も、やがて、一の島に着ましたが、見ると、彼方にも此方にも、金の大塊が澤山ころがつて居ります。早速、これも、船一ぱい積込むで歸りました。

太郎次郎お二人ながら、澤山の寶を持つて歸つてまゐられましたので、殿樣は大喜で御座りましたが、さて、待つても待つても、歸つて來りませぬのが、末子の三郎樣で御座ります。

三郎樣は、さきに、御兄樣に別れて、南の方へと

進みましたが、二月三月半年一年と、行つても進つても、小島なら一つ見出しませぬ。兵隊も假々少うなりますし。武器も、潮風に吹かれ通で、御座りますから、錆ついて、大方、役にたゝぬ樣にあります。中には、故國のことを思ひだして、しきりに歸國たいなどゝいひだしたものも御座います。三郎樣お一人で、大層に御心配なさいまして、やがて、珍しい島を見出して、大變に喜ばしい時が來るだらうから、言うて慰めたり、人間は、一旦、思立つたことを果さずに中途から止めるぐらゐ恥辱はないからと言うて誡めたり、または、病人などが出來ますと、自分より年長の者には、御父上にでも仕るやうに氣をつけて、看病してやり、年弱の者には、他の親が、其の子孫でも介抱するやうにして、大切にして遣りましてから、期樣御心配なさるこゝろを見ては、感心せずには居られませぬ。では、飽までも、この方を御助申して、目的を逐げさせ申さうと、一同、大に奮發いたしまして、更に、南の方へ南の方へと、一年も二年もの間、進むでまゐりました。

が、まだ、島といふ島に着くことが出來ませぬ。彼是する間に、今度は、一番大切な食料が無くなつて終いました。船の内に棲むで居りました鼠などまでも平げて終いまして、逐々、何にも食べるものがなくなりました。これには、如何な慈悲深い方でも、勇壯方でも仕方が御座いませぬ。最、今日か、遲くも明日まで、島を見つけなければ、永年の辛勞も、水の泡と消えしまふと、殘念さに一同涙を流して居りました時に、如何です。丁度、一島に漂着きました。

一同は、船の中に轉仆つた儘、島を見つけても喜ぶことさへ出來ほど弱つて居りました。三郎樣は、

兎も角も、一同のために何か食物を探して來ようと、やう〳〵のことで、巖崖を這上りまして、人家でもあるかと見渡しましたが、一向人の居る樣子も見えませぬ。木の實ぐらゐは有るだらうと、方々探行きましたが、何一つ食られさうな物も御坐いませぬ。あまりのことに、さすがの三郎樣も、落膽いたしまして、地上に仆れてしまひました。處へ、忽然、六七十ばかりの老婆が出て來ました。

婆　申し〳〵、旅の御方、貴方は、何地から御出になりました。

頭を擡げては見ましたが、三郎樣は、もう、口をきくことが出來ませぬ。老婆は、其の樣子を見てとりまして、

婆　ヲヽ、おいとしさうに、貴方は、非常く腹を空らして御出さうな。御馳走を上げませう。妾の家まで御出なさい。イヤ、この御樣子では、とても行かれますまい。一寸お待ちなさいよ。直、行つて來て御馳走を上げますから、

と、老婆は、いそ〳〵彼方の森の中へ入りましたが、やがて、歸つてまゐりまして、三郎樣の前に、立派な大いハンケチをひろげまして、

婆　ハンケチさん、この旅の御方のために、御馳走を一人前出して下さい。

と申しますと、其の言葉のをはらぬ中に、はや、ハンケチの上には、御飯に、お汁に、お平に、お皿、お猪口までも、それは其は、甘味さうな物が澤山にならびました。

三郎樣は、吃驚いたしまして、夢ではないかとも思ひましたが、先、何でも腹をふくらさなくてはと、遠慮なく頂戴いたしますと、夢どころでは御座いませぬ。眞實の御馳走で、しかも、其の甘味いことゝ言つたら、言ひやうもない程で御座います。

アヽ、船の中の人々にも、斯の御馳走を食べさしたらと思ひますと、情ぶかい方で御座いますから、喉へとほらなくなりましたので、少しばかり頂戴いたした限り箸をおいて考へて居られました。

婆　貴方、甘味くは御座いませぬか。ハテな、其様な筈はないのだが。なにか子細が御座いませう御話しなさい。御力になることも御座いませうに、

と信切に尋ねて呉れますので、三郎様も、實は、斯様々々の次第で、まだ、多人數、食物がなくて困つて居ること話しました。すると老婆は、

左様した子細で御座いましたか。年弱に感心なことで、其なら、このハンケチを上げませう。なに、餘生いくらもない身なり、殊には、妾が一生樂に食べられるぐらゐは、チヤンと別に用意して御座いますから、御持ちなさい。何時でも百人だらうが、百萬だらうが、頼むだ人數だけの御馳走は、直に、出しますから、早く、持つて往つて、皆々を喜ばして上げなさい。

と眞情をこめて言つて呉れますから、三郎様も、貴婆が、別に御困にならないといふのなら頂戴いたして參りますと、厚く、御禮を述べまして、船へ歸りました、直に、ハンケチをひろげて、船中の人數幾人の御馳走をと頼みますと、それだけの御馳走がチヤンと出て來ましたので、一同の喜は、たとへ様も御座いませぬ。充分に腹をこしらひました、から、勇氣は百倍です。斯様な寶がある上は、もう、何も心配することはないと、勇みいさみて又々、南の方へとまゐりました。

津村の桃花

小西甚之助

志度の里津村の桃花今盛なりと聞き、是尋ねむやとて、清水芳田ぬしをかたらひて出で立つ。正に、月の七日なり。空に晴れたり、風は暖かなり。ゆくての蝴蝶、栞隨を趁ひて、花のありかを導くに似たり。造田を過ぐる時、西の方遥に駒足の桃林見ゆ。

目路遠く眺めにとまる駒足山
　千もとの桃の眞盛にして

造田神社に詣て、其の山上なる御旅所の岩根に腰うちかくれば、是弘の大鉢山、霞の底に見え隠れして、まのもとに落ちくる。狂體らしかれと

池水を麓に盛れる大鉢の
　山は霞に今呑まれつゝ

是處を立ちて、下りゆくに、振面白き松のみ生ひ茂りて、滴らんばかりなる緑の枝に近う、白山の峯の懸りたる、またなくをかし

枝垂るゝ松も一重に白山の
　峯にたなびく八重霞哉

猶うち見やるに、其の麓近う紅霞のわたれるも捨て難し。

白山のしろきも染まるこゝちして
　ふもとわたりの桃の色哉

北に曲るに松翠盡る處、燃ゆるが如き紅帶は、繞りて山の腹に在り。一抔快を呼び此の中に入るに、幹臥し枝低れて徂くべうもあらず。微醺興は會せり。いざとて、匍匐せんばかりに之れを潜る。

はゝ酔ひておのれも花の面もちに
　潜りてぞゆく桃の下蔭

相部に出で、ふと顧みすれば、彼の白山の頂、吾が眺紫翠白樓(予が樓號。紫藤花を眺め白山を望むの意)上に見るには似ず、形またく變りて、圓滿春の頭顱のやうなり

馴れて見し峯の尖も方かへて
まろかに霞む春の白山

造福と云へる邊の、但ある片山岸に、今日を盛りと咲き亂れたる一木の梨花ありけり。鳥打帽子かんむれるわれ、

立よりて冠正せは梨のもと
疑ひあらぬ花ぞかゝれる

長行に來たるに、名たゝる大松は、早く既に朽ち果てゝ、宿り木の椿にやあらん。遺骸の上に生ひ茂りて翠の色濃なる、芽出度しと云はんか將哀れ也と云はんか。

名に負へる千代長行の松は無し
やとる椿に色を讓りて

當願尾敷に隣れる杜の山櫻うち仰げば、高田の池の緑と、相映帶して錦に似たり。水のあや滿ちみちて、笑るが如き春色を堪へる堤に來て見渡せば、彼方の桃山、紅氈を敷きつらねて、誰をか待つらん。頂の酒賣る家、白帘を靡して、誰をや、まねける。

掲けつる旗も高田の桃林
尋ねてよとやさし招くらん

こなたなる稻荷山、松青う深ういと淸らなるに、鳥居の影のほの見ゆるもゆかし。さいつ頃、浪華桃山の桃見に產湯稻荷の鳥居が詩趣に入り醉中「樓上呼レ杯坐ニ暖風一。桃花如レ熾眩ニ吟瞳一。翩々酒旆湯祠畔。華表同ニ吾醉面一紅。」と放吟したることなと想ひ回らし、それとは、旨意またく異なれども、

向つ岡桃さき出でゝ稻荷山

丹塗の鳥居色そまされる

の一首ぞ出でたる。高田の桃山は、花多きのみかは、山野河海の眺望に富める。茫々千頃青麥に見添ゆる島の翠鮮けきに、鷗の如く浮きつれ、葩の如く散りかふ志度の海の帆影、心も浮き氣も散るばかり也。殊に、紫雲英、蒲公英、の紅に黄に相彩どる錦繡を縫ひ巡りて、銀の如く流るる正面川、春日の光を正面に浴びて、我が瞳に照り返れる、何とか言はまし。

春の日に野邊の錦を照らすなり
玉の浦わにそゝぐ里川

玉の浦は、志度の浦の別名。かく歌ひて、其の桃山を東に越え行けば、是處なん津村の山の桃處なりける。見えたりや見えたり。花は、幾町歩の山とゝもに開き開らかれ、色は三泓の水とゝもに滿ち滿ちたり、芳田ぬしと語合、近く花の渦中に投じて歌ふも可なれど、また、遠く池を隔てゝ、花の霞を盃中に寫すも妙ならむと、見晴し好き山の端に、小松分けて坐を占めつ。上池中池下池と重れる碧瑠璃に映り來れる花の影先づ、我心に浮び、

桃の花笑を湛へて池水に
色みちとせの影を見るかな

かたみに盃取交して眺め居たるに、何やらん、向ひの方にもまた人と人、池を隔てゝ物取交しつつあり、浮べたるは盥の類ならく。

桃山の中を隔つる池の面
何送るらん綱手繰りつゝ

綱手ならずも、また一首を繰り出し

さし向ふ津村の山の桃林
かたみに色を照りかはしつゝ

瓢酒の我が面を染むるとゝもに。山は益々紅く見えてまた、尺寸の他色ぞなき。

うつもれて餘さゞりけりくれなゐの
　雲やつむらの桃の山々

花の霞は、既に、十一分に吸ひつ。いざ、是より花の渦中に投して、思ふがまゝ花神に翻弄せられんも、いと興深き業なれど、堤傳ひに其の山に至る、山の登り口に、數輪の乳母車置きたりければ、

乗り捨てし乳母車あり桃の花
　うなひを膝に誰か愛づらん

乳母も、桃太郎もいづこなるらん。花は山を埋め人を隠して、只笑語のみぞ、香波を破りて耳朶を擊ちける。今まで響きたりし三絃の聲は、搔き消すが如くに弭みたれど相語り相笑へる聲は、いよよ調子を高めたり。花徑羊腸或は花底に沈み、或は花上に浮び、花の海中泳ぎ廻ぐること時餘。去りて、其の頂に出でんとすれば、照り亘れる花の梢に、不圖、五劔山八栗の危峰を望む。何時の間にや日影は傾きけん。夕照紅中、劔端火花を散らすに似たり。

夕つく日花を照らして紅の
　色にやくりの峯もまはゆし

暮れ果てぬうちにとて、歸り路に就く。木村なる日内山、日のうらに過ぎたれど、家に着きたるは、門内の緋桃も、またく黒う見ゆる頃なりき。提籃に挿さみし一小枝取りて、兒女に與ふれば、嫣然桃花の笑めるよりも笑みて愛らしさ。

桃のはな

超舟漁史

かあちやんプーレは何んだらう
　坊やはほしい取りたいな
ゑまひ目出たきみどり子か
　紅ふかきくちびるの
いろにもまがふ桃の花
　母は折りてぞ與へける



雑報

○宮廷録事

●●●●●御分娩期　目下、御産所に在らせらるゝ、東宮妃殿下には、今明日中に御分娩あるべき趣きに漏れ承はるが、妃殿下には、頗る、御健勝に渉らせらるれば、御安産疑ひなかるべく、擧國抃舞し、千秋萬歳を謳歌する近きに在るべしとぞうけたまはりぬ。（四月廿七日拜記）

●●●●●東宮還御期　目下、葉山御用邸御滯在中なる、皇太子殿下には、妃殿下御慶事後直に、還御あらせられ、御命名式幷に初御參内等にも、御參列相成る由。

●●●●●●●●●●東宮御所の御用意　前項記し奉りし如く、近く御慶事あらせらるべきに付、東宮御所に於ては、晝夜、諸般の御用意に怠らせられず、宮内省の如きも、其の向々に於ては、昨今、中々多忙を極め居らるゝ由にて、田中宮内大臣、川口同次官の如きは、一切、旅行等を見合せ居れりと。

●●●●●●東宮の初瀬朝日行啓　皇太子殿下には過日横須賀軍港に、行啓あらせられしが、當日は、御微行にして、皇族の御資格にあらざりしを以て各艦よりも、皇禮砲の發射登桁式等も行はざりしが、鮫島鎭守府司令官、藤井參謀長、幷に、初瀬朝日兩艦長等は、停車場に奉迎し、軈て、海岸より御乘艇、先づ、初瀬に御乘組に相成り、艦長海軍大佐植村永孚氏各室を御案内申上げ、同艦の構造歴史及び回航の模樣等に關し、詳細言上する所あり、特に、大砲の公試發射を行ひて御覽に供し、茶菓

の御饗應あり。後、更に、朝日艦に御轉乘、艦長海軍大佐三須宗太郎氏御先導にて、前艦同樣御巡同艦長よりの上申を聞召され、間もなく還啓仰出だされし由。

●觀櫻御會　曩に仰せ出されたる如く去る十九日、濱離宮御苑に於て、觀櫻會御催　天皇陛下は、德大寺侍從長御陪乘、皇后陛下は、高倉典侍御陪乘にて、午後二時卅分御同列正門より出御、順路に依り同二時五十分濱離宮に着御あらせられたるが、御催に依り召されたる、伏見宮貞愛親王、同妃、有栖川宮威仁親王、同妃、閑院宮載仁親王、同妃、華頂宮博恭王、久邇宮邦彥王、同妃、山階宮菊麿王、梨本宮守正王、小松若宮、同妃の各殿下を始め奉り、大勳位公侯爵各國務大臣、大臣禮遇、樞密院議長、各顧問官、陸海軍大將、勅任官、奏任官、有爵者、從四位以上、勳三等以上、各國公使、同館員、各領事、外國來遊中の貴客等二千餘名の人々は、午後一時過ぎより參苑、兩陛下を奉迎し、兩陛下には、直に、御苑に臨ませられ、櫻花御覽の後ち、假立食所に着御同所に於て、各國公使及び各大臣に拜謁仰せ付けられ、了て、各員一同に賜饌、午後四時半還御あらせられたり。

○表彰錄

●孝子　去にし二十二日午前十一時頃、芝愛宕下二丁目派出所前に人力車の梶棒を下し、三田へ行く路はと問ふたる老車夫あり。車は、漆剝げ膝掛の色褪せ、乘りたるは七十前後の老母にて、耳も疎げなれども、快色俤に現はれたるが、車夫の風俗、市中の人に似ず、言葉さへ鄙びたれば、巡查は不審を起し、問ひ質せしに、此の車夫は陸

中膽澤郡水澤町八百二、鈴木平七(五十)とて、農を營み、僅かに其日を送り居りしが、其の實母まつ(七十)數年前より、東京見物を爲したしとて、連りに口ずさみ居るより、孝心深き平七思ふやう、二度なき親に望を、叶はせずして別れともならば、此上の恨はわらず、如何にもして東京を見せしめんと、其より日夜稼ぎ續け、本月に入り、漸く相當の旅費を調へしが、汽車などにて窮屈なる思をなし、マツの老體に障などわらんは憚わり。途すがらの見物も、却つて、老母の目を喜ばしめんかと、用ゐ古したる人力車あるを幸に、破損を繕うて、まつをこゝろよく乘せ、十日、愈々鄕里を出發し、百餘里の長途を疲るゝ氣色もなく、日々東京に近づくを樂とし、馳せ通して、難なく着京したれば、其より、上野、淺草と、まつの珍らしかるを、已も樂しく見物し、今日は、高輪に義士の墓に詣でんと、母を乘せて愛宕下へ通りしなりと、包まず語りしより、巡査も、平七の孝心に感じ、之を勵まし、又、まつへは好き子を持ちたりよと賞賛し、親切に、道を敎へて急がしめしといふが、平七、鄕里出發の事は、當時同地の新聞にて散見したるに、途中事なく着京し、茲に多年の宿望を滿したる母子の情を想はゞ、此を記するさへ、何となく、嬉しく思るゝぞかし。

●旅屋業者の美擧　東京市宿屋業組合事務所より、左の賞狀に、金圓を添へて贈與し、又、慈善家より、左の如く惠與ありたりと。

感賞狀

貴君老母平生東京を一見せん事を心に期す然れども家計の足らざるを以て煩ひを爲す貴君孝誠措く能はず日夜盡砕して其資を積み玆に一輛の腕車を購ひ往返二百數十里の長程母を之に乘せ躬自から之を挽き東京に來り日々市内各所を遊覽し齡古稀に逢する老母をして歡心を貫徹せしむ其至孝の精神上は

教育の聖詔に遵ひ下は萬人孝養の模範となる我等組合に於ても貴君の孝道を賞讃して止まず茲に金五圓を進呈して聊か長途の勞を慰し併せて感賞の意を表すと云爾

明治三十四年四月廿五日

東京市宿屋營業組合事務所

岩手縣陸中國膽澤郡水澤町八百二番地

鈴木平七殿

尙贈與金は左の如し。

一金一圓神田區連雀町寄席白梅亭、一金八十錢神田郵便局内三名、一金廿錢手拭二筋同區連雀町車屋相川、一菓子一袋本鄕區湯島竹内重一、一金一圓神田區須田町旅館後藤卯助、一金五十錢右同斷女中一同、一金五十錢同斷帳場酒井甚之助高田傳吉、一金五十錢神田區連雀町車屋相川内辻本靑木、一金一圓神田區連雀町旭樓支店雇人一同、一金五十錢本鄕區妻越町下宿福島より、一金二圓神田區表神保町旭樓本店辻井喜太郎、一金五圓東京市宿屋營業神田組合事務所總代辻井喜太郎、加藤市次郎、宿泊料無代假神田區連雀町旭樓分店萬世館辻井仁四郎

●●●●●●●

●左右田氏の美擧　横濱左右田銀行頭取左右田金作氏は、故夫人追善の爲め、左の金額を、慈善事業の基本金として寄附したり。おひ〳〵、是等の美擧のおほくなりゆくは、いと〳〵喜ばしきことなり。

金百五十圓　横濱婦人慈善會附屬病院へ
金五十圓　横濱孤兒院へ
金百圓　東京福田會へ
金百圓　東京共濟慈善會へ
金五十圓　東京養育院へ
金五十圓　東京愛國婦人會へ

●●●●●●●

●一鄕の模範　岩代國大沼郡野尻村中向に、猪岐文吉(四十)といふ者あり。父の辨次といへるは心ざま良しからぬものにて日夜飲酒にのみ耽り、之が爲めに、僅か計りの、資產をも、瞬く間に蕩盡して、其の身も果敢なくなりたるが、後に殘りし母ゑんは、日頃、多病にて、明治の初年より聾となり、一家糊口にさへ差支ふる程になりしかば、文吉は、親族の周施にて、同村の菊池幸滿方の僕

となり、僅かの賃錢を得て、辛くも母を養へり。是れ、文吉が未だ十二歳の時なりき。然るに、母は、去る二十年十二月三十日死亡したるが、文吉は懇に、其の跡を弔うて、さながら、生ける人に仕ふる如く事へたり。文吉が、又、主家に仕へて勞を厭はず、常に、主家の繁盛は我身の幸福なりとて、孜々として働くにぞ、同地にては、一郷の模範として深く、其の志を稱せりといふ。

●●●●

●公益美談　伊勢國鈴鹿郡の伊藤忠孝といふは、同地に、名を知られし人望家なるが、常に、公利公益を計りて倦む事を知らず、嘗て、川崎尋常小學校新築の際、資金を寄附して、特に、同縣知事より、木杯を下賜せられし事あり。又、赤十字社事業に熱心にして、嘗て、一村内にて三十餘名の社員を勸誘したる事もあり。其の他、神社の營繕、道路の改修等にも、人に先んじて奔走し、盡力したる功少からず。而して、氏は、又、其の專攻したる學術が、久しく、世に起らざるを遺憾とし、此頃、日本國体學館といふ塾を開き、大方の贊襄を得て、多くの學生を養成し、他日、國家有益の人才を薫陶せんとするに餘念なしといふ。

●●●●●●●●●

●帝國婦人會とアイヌ人　北海道茅部郡落部村舊土人辨開凧次郎(舊名イカスパ)は、土人に似合はぬ篤志者にして、曩に、皇太子殿下御慶事の際にも、其の手捕にせし牝牡の熊二頭を献納せし由なるが、今回、愛國婦人會なるもの起りて、會長松前子爵より趣意書を送りたるに、同人は大に、之を贊成して、直に、其三長女シラ子を入會せしめ、尚は、其の捕獲せし熊一頭を寄附せんとの念切なれども、其の便宜なきに困じ居る由同會に申おこせたりとぞ。

○教の栞

●故瓜生岩子刀自の銅像は、豫て土方龜子、板垣絹子、吉井靜子、三島和歌子、岩佐德子、後藤和子、河野關子、原禮子の、諸氏が發起で、建設委員には、澁澤榮一、吉井幸藏、三島彌太郎、後藤新平、箕浦清四郎の五氏が當られ、模型は大熊氏廣氏、撰文は下田歌子女史、書は土肥直康氏等にて、夫々滯りなく竣功しましたから、去る月十九日午後一時、淺草公園第四號地、即ち、觀音堂と水族館との間に於て、除幕の式を擧げられました、さて其の次第は、第一、開場奏樂。第二、委員長澁澤男爵除幕の辭。第三、除幕（此時一同起立奏樂、第四、藤澤寺覺阿遊行上人開眼。第五、來賓河野廣中氏演說、第六、淺草寺修多羅亮延大僧正供養。第七、瓜生家總代瓜生祐太郎氏答辭。第八、閉場奏樂。しかして出席者一同に茶菓及折の饗應がありました。本日は好天氣のため來賓も多く、會員其の他中々の盛會でした。

刀自の事は今更申迄もなく、諸媛の既に御存ではありませうが、渺たる寡婦の身を以て、死後いくばくもなく、二千の有志が四千余圓の寄附をして、かゝる擧に至らしめたるは、決して偶然ではありません。刀自は會津の人で、同地の弊風を改良し、官より賞を受くる事三度、又かしこくも、　謁を皇后陛下に賜はりたる事もありました。下田女史が撰文の冒頭に於て、嗚呼刀自は菩薩の化身なりしと謂はれたのは決して過賞では御座りません。刀自が天上界の人となられたのは、實に明治三十一年で六十九歳の時だそうです。今や肉身は消滅しても、溫容慈顔さながら生る如く、其の遺業と共に人となりを後世に傳へて、以て善行者の龜鑑とし、大に世教を益する事が少なくないのであり

ませう、嗚呼第二の岩子刀自たる人は、果して誰れでありませうか。

●フレーベル會第六總會　去月二十一日午後一時、女子高等師範學校附屬幼稚園に於て、第六總會を開會すると云ふ案内狀を、同會々長の高嶺さんからいたゞきましたから、定刻に參りましたが、まだ、會員の方々も御出席半ばなので、來賓も町田則文さんと、大阪の瀧山瑄さんとの二三人で、外の方々は、まだ、御出席になりませんけれども時針は少しも猶豫なく進んで、御定めの時刻となりました、所が、御出席の方々が大層おそく、從つて小數ではありますが、會長さんもそれがために、約束時間を違へるは、甚だ遺憾であるからといつて、豫定の如く開會になさいました。諸媛も御存じの、我々が祖先粟田眞人朝臣が、唐土に使したとき、彼の國の人々から、嫻雅儀容眞に君子國の人に恥ないと、大に稱讃されました、君子國の子孫だけそれだけ優長で輕々しくないと申したなら誠に立派ではあるが、まあ、我々同胞のうちには、時間を守ると云ふ習慣が如何にもゼロの樣でそれは、事務が、各々多忙からでもありませうが、何所の會でも、指定時間に集ると云ふ事の乏しいのには、甚だ殘念であります。とんだ、話が橫にそれましたが、高嶺さんの開會の演說から、主幹中村さんの會務の報告がすみますと、幹事の改選がありまして、暫く休憩しました、此の間に、四五ヶ所の幼稚園から出品した、幼兒の自作品展覽場へ參るやうになつて居ります。此の時には既に、教育會長の辻さんは、盲啞學校長の小西さんだの、國民教育會主幹の多田さんなど、其の他の方々も大底は御出席になりまして、共に參觀いたしました。折りから記者は今更の如く、貧兒

敎育を忽にしてはならんと云ふ事を、いたく感じました。それは外でもありませんが、貧兒の思想が如何にも茫然たるものと見えて、描いた畫がボンヤリとして居つて、何が何やら少しも分りません。其の庖刀と云ひ、提灯といつても、似て居る部分が少しもありませんが、之れに反して、普通の幼兒が描いたものは、不手なりに形が出來て居ります。それから華族の御子さんのは、如何にも優美高尙の處がありまして、幼兒が自ら作た唱歌の如きは、中々よく出來て居ります。してみると家庭より受け得たる第二の天性と云ふ者は、實に恐ろしいもので、保姆が同樣に敎へても、かゝる現象を呈しますではありませんか、私などのやうな局外者では分りませんが、かゝる處に注意せねばならんかと思はれます。

然しながら、子供の手に出來たものは、何にとなく無邪氣で、天眞爛熳でないものは御座りません。中にも人形の畫が、恰も古代の土偶のやうであるには、我も人も床しく感じました。

それから今度は、町田さんの遊戯に就ての演說と瀧山さんの大阪愛珠幼稚園の經歷談とがありまして、餘興には、小西さんの紹介で、盲啞學校の盲生が琵琶を彈じました。それは〳〵中々の妙手なのです。此の方は三歲のとき明を失ひなされた不幸な人で原籍地は福岡縣で、今年漸く十七、名は廣田謙太郎と申され、家兄は今尙大學の學生だそうです御家も相當な方であれば、これをせねば生活上に差問へると云ふ譯ではないそうですが、いつ迄も、父兄の世話になり度ないといふ決心から按摩でも習はふと云ふのを、小西さんも色々親切に、上手な琵琶をすてるも惜いされた、學校よりも補助するから、專心に琵琶を研究せよとの事で、今

は其の方のみ修業して居なさるそうです。だから小西さんからも、琵琶を聞き度と云ふ人は成るべく招てやつて貰ひ度と、御頼みがありましたが、かゝる不幸な方には、御互に力を添へて、早く屈指の先達となさらして上度ものです。記者も、諸媛の中で聞度と云ふ方は、尤も遠方の御人は仕方がありませんが、東京市内の方々は、何卒招いて上ていたゞき度と云ふ事を御願します。今日演ぜられたる曲は、大塔宮の熊野落と、那須宗高が扇を射落したるとの二切でしたが、私は丁度此の二三日前に鎌倉に旅行しまして、親しく、親王が誠忠の爲め、却て毒刄にかゝらせましたる岩窟と、逆賊淵邊義博が、御首をすてまゐらせたる古跡を拜しまして、悲憤の念少時も腦裡を去らぬ處、亦ここに、宮の御事をきゝまつり、且又宗高の事については、彼の天德寺了伯の昔を思ひ合せて、坐に感慨胸に逼り、ひそかに襟をうるほしました。

それから隨意に話をしたり、庭で遊戯をしたり、又茶菓の饗應などもありまして、閉會になりましたのは、丁度聖堂の屋根の上で、烏が一羽暮れ行く空を淋しげにながめつゝ啼て居る頃でありました。

今日の演說は、皆有益な御話ですから、其の要領なりと御話し申すとよろしいが、餘り長くなりましたから、又折りを見ていたします。（靜雪子）

〇侯爵山內家婚禮式（二）

宮家より武家へ御婚禮の事

宮家と武家との御結婚の時には、御婚禮と稱して御婚儀といはず、大臣家の御結婚を御婚儀と稱せるが如し。即ち、舊記に、

文政八年酉二月

近衛内大臣忠熙公婚儀雜記

と記し、其の次第を御婚儀次第と稱せり。又、

享保九年九月十九日卯刻九條右大將殿幸敎卿新造御殿徒移五菓並同月廿七日御嫁聚之儀有之尾張殿女三本饗膳亦三日夜餅筥壹合調進之圖

と、記したる畫卷の題辭に、

九條右大將殿御婚儀御前物圖

と記せるを以て、此家々の程度に稱する名辭が、即ち、御婚儀なる由を知るべし。

さて、宮家より武家への御式を御婚儀と稱せずして、御婚禮と稱するは、專ら、武家の式によられたる故に稱するならめど、さにはあらで、其式を公家式になしても、其稱呼を直しくせんためには、なほ御婚禮の名辭を以てせしが如し。

寛保二年八月廿三日　九月二日京都御發足

京極宮姫宮號豐宮御方有馬家へ御婚禮

懸盤三脚玉御膳調進圖

かくの如く記したるを以て、一證とすべし。此時の膳部は、有馬家より禁中の有職を以て聞えたりし、膳夫家の長人高橋家に依賴してとゝのへしなり。

第一に、打敷の圖をあげ第二に膳部三脚かけばんをあげ、第三に酒盞折敷をあげ、次に、銚子片口をあげて、終に御厨子所預釆女正紀宗直と記せり。

宗直朝臣は、寶石類聚の著者なり。門弟に大内裏圖考證の作者、裏松入道右少辨光世などなり。

(以下次號)

○全國各女學校卒業生（第一回）

こゝには、全國の各女學校卒業生の氏名をかゝげて、聊か、女子敎育奬勵の一端ともせんと思つて、特に、今回より設けた次第であります。しかし其の順序は、各學校より寄贈の順に依ります。

●女子高等師範及女學校卒業生●●●●●●●●●●●　但し、本科卒業生の氏名、併て卒業式の模樣は、既に前々號で御通知いたしましから、茲には、只、同校國語漢文科專修生と、附屬高等女學校卒業生の族籍氏名を出すこととしました。其の種別は次の通りであります。

●女子高等師範學校國語漢文專修科（いろは順）

廣島縣士族　磯島ツチノ　　栃木縣平民　石崎さく
德島縣平民　伊勢フジチ　　兵庫縣士族　島田きく
愛媛縣士族　林よし子　　廣島縣平民　二宮ナホ

福島縣士族　星さや　　群馬縣士族　島海じゆん
福島縣平民　小野マツ　　山口縣平民　河口こさ
石川縣平民　河崎じゆん　　長野縣平民　四方ゑい
德島縣士族　棚橋イチ　　靜岡縣平民　武田さみの
千葉縣平民　竹澤恒　　兵庫縣平民　恒川三枝
宮城縣士族　中村しげ　　佐賀縣士族　太田[illegible]
靜岡縣平民　大城久良　　長野縣平民　窪田美代
東京府士族　丸山モト　　神奈川縣士族　松井龜代壽
和歌山縣士族　松本八季　　新潟縣士族　牧野キヤウ
靜岡縣平民　江藤三保　　山口縣士族　阿部ツル
東京府士族　安達けい　　德島縣平民　淺野ムツ
福島縣士族　佐原良　　福井縣平民　堺さき
靜岡縣士族　宮村順　　高知縣平民　白石德
東京府士族　清水しげ　　鹿兒島縣平民　廣瀬クマ
岡山縣士族　廣瀬きく　　東京府士族　森乙女
石川縣士族　森絲　　新潟縣士族　關しん
大阪府士族　杉野奈良兎

●附屬高等女學校補習科

千葉縣平民　林よね　　東京府平民　長谷川リウ
福島縣士族　小倉なな　　東京府華族　加藤悦子
東京府平民　高田フミ　　東京府華族　津田ムメ
香川縣平民　長西千代　　東京府士族　井上春

東京府平民　猪俣　政　　高知縣士族　山内　壽榮
東京府士族　小林　てい　　廣島縣士族　小林　淨
東京府士族　小西　はつ　　東京府士族　足立　鈴子
千葉縣平民　木間瀬　本　　東京府平民　篠　萬年青
神奈川縣平民　關　房

●附屬高等女學校

千葉縣士族　岩崎　花子　　北海道廳士族　茨城　てい
埼玉縣平民　稻村　ふみ　　栃木縣平民　石井　一
東京府平民　花岡　眞　　佐賀縣士族　原　園
東京府士族　長谷川すて　　北海道廳士族　長谷川　島
愛媛縣士族　穗積　靜　　東京府士族　富田　茂
千葉縣平民　富　りつ　　東京府平民　土岐　春子
神奈川縣平民　小野　八重　　東京府平民　柿沼　稜
東京府平民　川上　まさ　　東京府士族　樫村　竹
東京府士族　河原五百枝　　東京府平民　河野　民
東京府平民　笠井　はな　　新潟縣平民　片山　リウ
和歌山縣平民　苅谷　まさ　　東京府平民　田口　時
北海道廳士族　高野　わさ　　石川縣士族　武部　次枝
滋賀縣平民　武久　せい　　長野縣平民　武居　ケイ
兵庫縣平民　高井　ふく　　栃木縣平民　田部井ノブ子
東京府士族　高嶺　よし　　東京府平民　土屋　房
東京府士族　成川　ソノ　　東京府士族　永田　竹

熊本縣士族　中原はつね　　東京府士族　中山　みき
東京府士族　上山　靜　　靜岡縣平民　井上　芳
靜岡縣平民　井口　きよ　　東京府華族　太田　倉子
埼玉縣士族　大岩　鷹　　石川縣士族　八十島喜增
青森縣士族　山川　松枝　　岡山縣士族　矢野　柳子
鹿兒島縣士族　松元　晴　　山形縣平民　松浦　のぶ
新潟縣士族　藤木　福　　千葉縣平民　藤田　のぶ
東京府士族　藤澤　トシ　　神奈川縣平民　古屋　茂登
東京府士族　福田　八重　　東京府士族　小林　すゞ
東京府士族　小堀　磯　　東京府士族　小室　可笑
東京府士族　近藤　なつ　　大分縣平民　古城　拾
東京府平民　寺田　吉　　福岡縣士族　淺山　ソサ
千葉縣平民　青柳　松　　新潟縣平民　青柳　みつ
福島縣平民　赤阪　峰　　東京府士族　阪田　睦
千葉縣平民　佐藤　俊　　茨城縣平民　猿田　いひ
埼玉縣士族　佐野　波　　石川縣士族　櫻井　彌知
三重縣平民　御木本みれ　　愛知縣士族　三輪　業
千葉縣平民　四宮　美代　　東京府平民　柴崎　たか
長野縣士族　平山　千重　　山口縣華族　毛利　一代
東京府平民　森田　由　　大阪府平民　盛田　せい
東京府士族　鈴木　知可　　東京府平民　鈴木　のぶ

（以上）

●●●●●●●●東京女學館卒業生　去ぬる三月同校の業を卒へたる人々は、合計五十一名で、其の氏名、及、種別は、次の如くであります。

高等科

（イロハ順）

東京府　三宅　秀子

普通本科

東京府	伊藤ふみ子	石川縣	石黒こき子
福岡縣	石川きよ子	愛知縣	石川てる子
東京府	西村よし子	富山縣	雄山百合子
和歌山縣	岡田　幸子	長崎縣	岡本つる子
愛知縣	神谷てい子	鹿兒島縣	蒲生　梅子
佐賀縣	辰野すま子	秋田縣	武石いせ子
東京府	曽野きよ子	山口縣	曽禰せき子
東京府	植村すみ子	長崎縣	上田みほ子
東京府	井上　信子	東京府	井上ゆき子
東京府	大谷　貞子	東京府	倉西はる子
北海道廳	桑田たけ子	東京府	日下部みか子
埼玉縣	栗原てる子	神奈川縣	八佐いさ子
高知縣	前野きしね子	東府府	福井ふく子
埼玉縣	近藤みち子	茨城縣	江戸みす子
靜岡縣	青山いし子	鹿兒島縣	桐野ひろ子
島根縣	志立きよの子	群馬縣	白石まさ子
東京府	白井もさ子	廣島縣	遠藤千代子
東京府	鈴木千代子	靜岡縣	鈴木芳子
神奈川縣	杉谷　幸子	千葉縣	鈴木てい子

普通選科

北海道廳	岩根みゑ子	東京府	小野こさ子
東京府	岡部ひき子	東京府	加藤　馨子
東京府	玉置みち子	東京府	鶴岡てる子
秋田縣	大久保みち子	東京府	藤井千歳子
山形縣	佐藤にい子	東京府	油比ひな子
東京府	油比つる代子	東京府	鈴木すゞ子

（以上）

●●●●●●●●婦人繪畫研究會趣意書　諸媛も御存じの如く、先きには、女子美術學校やら、技藝學校などが出來ました處、今又、かゝる會の設けを耳にしましたは、嬉ばしい事であります。即ち、其の趣意書、及び會規等は、左の通りです。

今や我が大御國の美術いよ〳〵ます〳〵振興し貴さなく賤さなく皆美の神髓たる繪畫をまれび又之れを愛で樂まざるものなきに至りたる秋に際し獨り婦人界に於ける斯道の光輝揚らず轉た索寞の感あるは寔に歎ずべき所なり

去れば師翁熊谷直彦先生夙に岡本豊彦岡本茂彦兩翁の流を汲み又内外諸派に涉りて優に一家の畫風を起し力を斯道に竭させ給ひけると多きも故ありて久しく指南の業を辭せらるゝをもて世の心ある人々皆其教を受け師の美風を顯揚するに由なきを如何せん妾未熟の技を以て此の會を創立するは敢て當る所に非らずと雖ども幸に亡父雲外の訓に依り長年月の間先生の門に遊び一意專攻聊か悟る所ありたるをもて其知り得たる所を傳へ我派の隆運を助くるは妾の躊躇せざる所なりこゝを以て此頃師の聽許を受け此會を創め世の諸姉妹と共に大に婦人畫界の振興を期し併せて師道の顯揚を勉めむとす切に希くは同感の諸姉妹相携へて陸續入會し共に妾の素志を成さしめ給へと云爾

熊谷直彦先生門人

婦人繪畫研究會會主

明治三十三年十二月　馬杉青琴謹識

婦人繪畫研究會會規

目的

本會は專ら婦人繪畫の道を啓發し特に熊谷直彦先生の畫風を研究振興するを目的とす

會場

本會場は假りに本鄕區彌生町貳番地はノ十四號に設く

研究期限

研究期限は(三個年)を以て定期とし其得了者には修業證書を贈與す

但し定期修業後引續き研究せらるは隨意とす

研究方法

研究方法は極めて簡便を主とし道に入り易からんことを務むと雖へども概ね別に定むる所の課程に依る

但し入會前の技能及び經歷の程度により研究期限を短縮する事あるべし

研究日時

研究日時は毎土曜日午前八時より同十一時迄午後一時より同四時迄の内適宜來會する事を得

但し例月第三土曜日は金曜日を以て研究日と定む又定例休會は歲首歲末各二回とす炎暑中若しくは止むを得ざる場合には臨時休會し或は會の日時を變更することあるべし

會員

本會の會員は婦人に限る

入會

本會の目的に贊同し會主と同感同志の婦人は年齡の多少を問はず適宜入會し會員たる事を得

本會に入會せらるゝ者は左の書式により宿所姓名を記載し研究會會主へ宛差出さるべし

但し會員轉居の節は其由申出らるべし

會費

入會者は入會金參拾錢毎月會費五拾錢を前納せらるべし

但し毎月會費は其月末に翌月分を前納の事

雜件

本會會員は總て友愛至誠を旨とし協力一致進んで婦人繪畫の隆興を期し斯道の光輝を發揚せん事を企圖せらるべし
會員事故ありて休退會せんとする時は其事由を具して申出らるべし
會員事故ありて休會し後再び入會せらるゝ時は入會needs
本會會員にして穩當を欠くの行爲ある時は除名する事あるべし
本會の會規を改正せんとする時は概ね會員の協議を以て決すべきものとす
但し開會は明治三十四年一月第二土曜日よりとす

研究學期概目

一個年前期
○毎會會主畫手本二面　○運筆習練　○眞寫
一個年後期
○同前　○同前　○同前　○傳摸移寫　○作圖
二個年前期
○毎會會主畫手本二面　○運筆習練　○眞寫　○傳摸移寫　○作圖
二個年後期
○同前　○同前並ニ設色　○同前　○同前　○同前
三個年前期
○毎會會主畫手本二面　○運筆習練並ニ設色　○眞寫　○傳摸移寫　○作圖　○伸縮
三個年後期
○運筆習練並ニ設色　○眞寫　○傳摸移寫　○作圖　○伸縮　○席畫
但し會の便宜により眞寫會作圖會席畫會等を催すことあるべし

○青山綠樹

●衣服改良　若し、改良の意氣にして、單に、從來の形體を變更すといふに止まらば、或は、可ならむ。文字に示すごとく、善良に改むるものならば、今日の所謂改良と稱するもの、多くは、後者の意義に於いて唱導せらるゝを惜む。婦人の衣服改良のことは、夙に、識者の間に認めらるゝといへども、さりとて、いまだ、やゝ良好とするものをだに得ること難きが如し。梶田半古氏、讀賣新聞紙上にて、改良衣服といふものを發表したれど、にはかに實用さるべくも見えず。或は、洋服と琉球服とを合せて、更に、朝鮮服を製造せるありといふものもありとか。とまれ、はじめて、斯の考察を發表したる氏の勞は、大に謝せざるべからず。彼の濱尾、鳩山、山脇、三輪田の諸婦人の

設立せられたる衣服改良會は、如何なる良服をや得べき。最も望を屬する所なり。聞く所によれば、袖を短くし、衣丈をツイタケにせむといふ議は、大方、決定せらるべしといふ。しかしながら、これはまだ、所謂改良の第一着歩たるに過ぎず。可否をいふべきにもあらず。たゞ、同會の健全ならむことを祈らむのみ。要するに、婦人の衣服は衞生を阻障せざる限りは、大に優美の點を與へざるべからず。ただ、從來の衣服を變更せむとするが如きは、寧ろ、婦人斷髮令を下したる後に至りても、遲しとなさざるなり。

●●●公德問題　公德論のさかんなるは、いと喜ぶべし。たゞ、實際に於いては、所謂公德の日にます〳〵頽廢におもむくにぞ、いと慨かしけれ。雨いたく降りける日、何家の婢やらむ。鐵馬に乘りて、右手の入口に坐を占めぬ。彼は、容姿、頗る醜にして、服裝、また、極めて粗末なりき。然れども、彼は、其の衣服を濡さむことを恐れ、強ひて、餘地をつくりて、其の傘を戸の方にたてかけぬ。たま〳〵、夫婦づれの乘れるものあり。年の頃四十ばかり、夫は外套を、婦はアヅマコートを着たり。入りて左方に坐し、直に、前なる餘地を發見して、共に、其の傘を投げかけぬ。婢、堪へずして其の裾をかゝげたれど、猶、其の濕を避くる能はず。夫婦は、之を見れども、毫も意に介せず。婢は、遂にたちあがりて、彼の革にすがりぬ。夫婦は、なほ、知らざるまねす。一書生、大に憤慨し、婢のために彼の夫婦のために諭せど、彼、頑として應ぜず。婢は、事の自己に起れるを意とし、上野までの切符をすてゝ、五軒町にて下りぬ夫婦は、依然談笑をほしいまゝにし、乘客は、皆、婢のゆく姿の美ならずして、しほれたるをわ

らふのみありき。世の醜を暴露するを快とするものにあらず。たゞこれ、多きが中の一をいへるのみ。かゝる世には、公德論の熾なるを望むこと切ならざるを得ず。其の實行を望むことは、勿論、非常に切ならざるを得ざるなり。

●女子大學校　たゞ其の四方に、白線を加へて、形を大學の菱形帽と同じくして、生徒を喜ばしむる學校あり。門柱の標札、なほ、米國文學博士を要する世には、大學の名の下に生徒を集むるの策は、大に時にかなひたる考案あり。名に渇せる敎師を招くには、最も、妙策たるを失はず。寄附金を得るに便宜おほかりしならむ。況んや、侯爵伯爵男爵といふ肩書附の祝辭演說は、いかに、無智の徒をして渇仰の念を起さしめけむ。其の世人をして女子敎育に注意せしむるの勢よりは、ハイカラア姬たちの跳梁跋扈せむ將來をおもへば、其の名に於いて、まづ、穩ならざりしを惜まずむばあらず。其の主張の誤れることは、さきに、しば〲是をいへり。更に之をいはず。

●自轉車　の流行は、遂に、婦人界をも侵せり。彼の新聞紙によりて、その徒黨を嘯集し一大競走會をはじめむとする徒のごときは、沙汰の限りなり。某の老翁の、歌つくることを忘れて、婦人に自轉車をすゝむるが如きは、狂氣の沙汰とやいはまし。たゞ、生意氣げに見ゆるがために然いふにあらず。生を損じて、婦人の最大なる務を缺かしむることを憂ふればなり。

●實際問題　一賤女の名にて、左の問をおこせたり。今更これをいはむに堪へざるまで、しばしば斯ることをいへり。愛讀孃は如何。この種の問題に對しては、今は、諸孃の意を聽かむことを

望む。

賤の女は、女鑑愛讀の、一人なるが、もし左記の如き、場合に遭遇したらん折、女子たるものの、取るべき、處置は、如何にして、可なるべきか。記者足下、幷に愛讀諸媛の、高教を、垂れ給はば、幸になん。

おのが、知邊に、貞正靜淑なる一妻女あり。學藝にも拙なるらず、そが所夫たる人との中らひ、いと睦まじく、美しき愛しの、子女をさへ擧げ、一家の波風もなかりしに、所夫なる人の、位置の進むに從ひ、交際を廣くし、こゝかしこの、宴席に列なることなどの、多き爲にや。さしもに、方正なりし、品行の、とみに、亂れて、妓を弄びて、外に夜を更かし、時に或は、妻女をして、孤閨を守らしむることも度々あれど、其の妻なる人は、誠に愛でたき心掛にて、露恨める色なく、嫉める樣もなく、只管、夫の意を迎へ、朝夕身を愼めるに引きかへ、夫なる人は、妻の心を思はざるはあらざめれど、一度酒色に耽りては、容易に止むべき樣子なく、此の程に至りては、妾とやらんを圍はん心のよしを聞きて、いたく打驚き、此の貞淑なる、妻たる人の、不幸を思ひやりぬ。如何に嫉妬なき、女子とはいへ、夫のかゝる行爲を見て、人情として、内心幾分かの、不快なきを得んや。これよりして、一家の風波の起ることもあらん。子女の教育に、影響を及ぼすことも少なからざるべし。あはれ、かゝる場合に際し、妻たるものは、如何に處すべきか。唯、夫のなすまゝに、從ひ、一生を、唯々諾々として不快氣兼の内に送らんか。將た、また、意のあるところを述べて、夫を諫めんか。さすれば、嫉妬と思はるゝを如何せん。女子た

るもの丶云々すべきことあらねど、今の紳士とやらんは畜妾を以て、人にはこり、妾宅を建つるを、榮譽と思へるが多き樣あれば、こも、ただ、妻たる身の不運とあきらめ、我分を盡して止まんか。あはれ、大方の諸賢、一片の同情を以て、人のため、わが迷ひを、解き給ひてよ、

●獨身者に課税す　米國ペンシルヴアニヤ洲議會にては、四十歳以上の男子にして無妻なるものには、百弗の税を課する法案を提出せられたりといふ。而して、其の收入は、同州内の女子にして、不幸、婚嫁の機を得ざりしため、衣食に窮する者を收容する救助院の維持に充てむとするありと。これは、あめりかのこと、わが國にては、四十歳以上の婦人にして、いまだ婚嫁せざるものには、(する能はざる事情の正確なるものは、この限にあらず)二百圓の税を課することを主張するものありとか。

●夏來らむとす　來年のことをいへば、鬼さへ笑ふといふを、春の末に、夏のことをいはゞ、人くらゐは笑ふべしや。たゞ青しとのみ打見たる木草の、明日ともいはず、涼しげに見ゆらむぞかし。やがて、水を欲し、氷をのぞみ、赤痢をおそれ、虎病を避くる時にありなむ。かねてより、心を養ひ身を養はゞ、その時にいたりて、にはかに、悔ゆることも出來まじ。たゞ、青しとのみ見てな過しそ。

○口繪につきて

●櫻花爛熳　の圖は前號誌上を以て、既に告げたる如く、畫伯岡倉秋水氏の、特に丹精を凝らしたる處、其の高妙にして雅趣ある、眞に、諸媛が、清楚にして高潔なる心にも比ふべきに非ずや。昔、

洛陽の人牡丹を謂ひて花とし、成都の人海棠を稱して花となし。邦人更に櫻を以て花王となしき。古人歌ひて曰く。

敷島の大和心を人とはゞ
朝日に匂ふ山ざくらかな

と、牡丹や眞に婀娜たる美人の如く嬌にして艶。海棠又淖約たる佳人美にして麗。されど稜々たる節婦の如く貞烈凛然、散りて尚惜まざる櫻花には、よも及ぶまじ。

あはれ、世の中は三日見ぬ間の櫻かな、實に駘蕩たる春も夢の如くにさめて、上野、向島、さては飛鳥山、御殿山なども、名殘をしく散り失せて哀れはや過去の噂とはなり、若葉のみ瑞々しく生ひ茂る今日このごろ、此の櫻花爛熳の圖に向ひて、己が心とくらぶるも又、一人のながめなきにあらやず。

●陳志　こは、日本女學校教諭師岡賀須子女史より特に寄せられたる筆跡、其の正胤大人は、實に同女史が嚴父にして、江戸の國學者なり。翁學を野々口、平田の門に受け、深く古典を究むと云ふ。幕末の際東西に奔走し以て王事に盡す所あり。文久三年二月、長尾郁三郎等有志八名と共に夜に乘じて、洛西等持院を襲ひ、足利尊氏以下三代の木首を刎ね、其の罪狀を書し、三條磧に梟す。時の守護職會津藩の爲に捕へられ、將に重刑に處せられんとす。會、長州土州の二侯きゝて其の志を憐み、乞て死一等を減じ、流罪を以て信州上田藩に預けらる。幽囚六年、歌を詠じ文を草して、聊か鬱を慰むされど一として、尊皇の言ならざるなしと、後、大政維新の赦に逢ひ、明治元年徵士を以て擧げられ、刑法官出仕を命ぜられ東幸に供奉し、進で監察司知事に任ぜられ、彈正臺大

巡察に遷り、三年宣教權中博士に轉任し、正七位に叙す、六年官幣大社、松尾神社大宮司に任せられ、權少教正に兼補せらる。後職を罷めて、神道事務局教授となり、十五年又出てゝ宮内省文歌御用掛となり、二十四年伊豫神宮本部の聘に應じて教授となり、神宮教協賛たり、又、廣島神宮本部愛媛皇典講究分所の教授理事等を兼ね、又、後進のために國文研究會、松山美娜備會などを起し、子弟を導きたる勞決して尠からず。三十一年七月病の犯す處となり、爲に京に歸りて、療養至らざるなかりしが、遂に、翌年一月二十三日、年七十を以て不歸の人となられたり。嗚呼其の歌の正々堂々たる、其の書の遒健なる、翁が誠忠の志髣髴として誌面にあふるゝを見る。（起舟漁史）

次號豫告

揮毫　副島伯爵

こは、去にし日、千駄ヶ谷なる、蒼海老先生の邸に参り、特に諸媛のために請ひ受けたる筆跡なり。先生が特得遒健の筆力は、恰も、蛟龍の雲雨に乗じて、天空を蹂躙し、猛虎の深山に在りて、風威と戰ふの概あり。

藤波紫白　高橋松亭

こは、本誌の繪畫擔任者、松亭の特に丹精を凝したるもの、其の技の如何に俗境を超脱したるかは徒に、記者の讃するを欲せざる所なり。

吉野紀行　下田義天類

我が大和の櫻國、如何でか櫻の名所に乏しからんや。されど、吉野の右に出づる者なきは、諸媛の已に知らるゝ處ならん。頃日國學家の泰斗下田先生、飄然杖を吉野に曳き、其の佳景を詩嚢に收め歸り、特に、本誌の爲めに起稿せられたり。若し夫れ、坐ながら吉野の花を賞せんと欲せば、請ふ之を次號にまて。

其の他、趣味津々掬すべきもの尠からず。

女鑑歌文月次兼題

五月廿日分
- 歌　郭公をまつ
- 文　海外の友に書籍を贈る文

右五月九日〆切

六月五日分
- 歌　月前橘
- 文　節儉の說

右五月廿四日〆切

六月廿日分
- 歌　旅中梅雨
- 文　某瀑布に遊ぶ記

右六月九日〆切

七月五日分
- 歌　蓮露
- 文　轉地療養中の友に送る文

右六月廿四日〆切

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

題

住所

姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題

住所

姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。

○總て書式に違ひたるは沒書とす。

○女子は、なにひとにても、隨意に投稿することを得。

高等小說

小說 醉人の妻

久保天隨筆

醉人の妻は純淸高潔の小說なり。紊亂せる家庭の讀物にあらず、又墮落せる學生の讀物にもあらず、醉人の妻は文學上特殊の地位に立ちて一種の異彩を放つものなり。淫靡を好む者の讀物にあらず、又趣味低き者の讀物にあらず。誠に其思想を淸新にし其感情を高尙にするに於て醉人の妻は倫を當代に絕つ。温良なる家庭の讀物、淑女良妻賢母の讀物、學者敎育家宗敎家の必ず讀むべきもの也

やまと綴 美麗裝本 發行

定價金五拾錢
稅郵金六錢

發行所 東京市本郷區森川町一番地 育成會

宮內省寶物取調局にて原本鑑查優等にして美術上要用なるものと認定

日本高名古筆集

掛軸用 長五尺 巾一尺八寸
美麗石版摺
定價六拾錢

豫約四拾錢五拾枚以上は三拾五錢市外郵稅貳錢豫約申込は六月二十日迄とし申込の際は爲替にて御送金の事〇御申込の順序に依り六月廿一日より送本す

弘法大師・後醍醐天皇・御伏見院・光明皇后・小野道風・尹大納言師賢卿・爲家卿・俊成卿・阿佛尼・吉備大臣・源賴政卿・慈恵大師・飛鳥井雅章卿・家隆卿・中將姬・慈鎮和尙・寂蓮法師・兼好法師・明恵上人・曾氏公・性空上人

●右は安田家有名の寶物に候處今般寫眞の上石版摺豫約募集致し候就ては敎育美術及鑑筆上の參考或は習字の手本として必要無二の珍版に付續々御申込相成度希望仕候

豫約申込所

東京市芝區櫻田本郷町十七番地
日本高名古筆集發行所

東京市銀座二丁目 服部商店
同神田雉子町 岡崎屋書店
同日本橋通三丁目 金港堂

総裁小松宮大妃殿下
副総裁鍋島侯爵令夫人

大日本女學會發行（東京麴町土手三番町二八）

をんな

第參號發兌

第一號第二號再版出來せり

定價金拾五錢全國無遞送料
東京神田表神保町三

大賣捌　東京堂

（卷首挿畫）福羽子爵筆懷紙○佐方鎮子歌かるた（論說）女子の體育安井哲子○迷、十時文學士（學藝）科學大意島村瀧太郎○美術一斑紀淑雄○沙翁梗概○作文批評今泉定介○作歌批評大口鯛二（修身）未來の姑鳩山春子（齊家）泰西禮法津田梅子○割烹石井泰次郎（世務）家政上注意すべき罰令談法學士ＨＴ○鑛山の話○產業の實況（史傳）英女皇傳下田歌子○十九世紀の婦人○國史上の婦人（訓解）暗流水谷不倒○教の梯子○鬼と農夫○武雄と文也（詞藻）晃親王遺詠○庚子夏日記坂正臣○みやび會詞藻（雜錄）清韓實歷談奥村五百子○床の間飾心得松浦伯爵○圖案武村十佐子（時事）増稅問題○私立大學（彙報）愛國婦人會其他數件

家事衛生

醫學博士三宅秀先生著
大日本女學會發行

總クロース綴金文字入り
定價金六十錢郵稅金六錢

大賣捌　東京神田一ッ橋通町七　有斐閣

此書は醫學の泰斗たる元醫科大學長醫學博士三宅秀先生が文部省の囑託に由り各府縣師範學校高等女學校の女教員方を集め夏期講習會を開きて講義されたるものを此度大日本女學會より發行せられたるなり書中衣服㊁飲食物㊂住居㊃育兒㊄看病の五篇に別ち細密其衛生法を示し我國一般の民度に應じて實行し易き樣に說明せられたり家政を主る人々に取りて此上なき有益の良書たるは勿論教育の任に當る人々にも缺くべからざる參考書なり

女鑑

明治三十四年五月五日發行

毎月二回五日廿日發行　第貳百貳拾八號

明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可